
ルームシェア

響子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルームシェア

【Nコード】

N7422S

【作者名】

響子

【あらすじ】

独身寮がいつぱいで、家族向けの社宅に同居することになった新入社員の三人。主人公のチカと、ユキ、カオル。名前は可愛いのですが、全員、男です。

対象年齢不問。BL注意。傾向：ノンケ主人公と、それを狙う変態眼鏡&性格のいい体育会系。他にも外国人講師とか女装癖の男とか、男の娘とか……、主人公は総受け気味

(全10話)

01（前書き）

主人公の千佳^{ゆきよし}は、大抵の場合、名前を「チカ」と読まれてしまう。からかわれる程度で実害はないが、やっぱり面白くない。

「ええっ……。独身寮の空き部屋、ないんですか？」

総務のオバチャ……。ベテランの女性社員が、苦笑しながら答えた。

「ごめんねー。君、決まるの遅かったし。やっぱり今って、少しでも節約したいのか、希望者多かったのよねー。寮を出てく人もいないし。ただまあ、入社5年目までって決まりはあるから、来年には空くと思うよ」

でもそれじゃ、今、住むところがない。

「でね。臨時ってことで、君を入れた新入社員三人で、家族向けの社宅に住んでくれるかな。3LDKだから、個室はあるの。キッチンとバストイレは共同になるけど、結構、生活時間って違うと思うのよね。社有のワンルームが空けば、順次移ってもらうし」

「はあ」

俺は仕方なく頷く。この就職氷河期に、やっと入れた会社だ。一応、代替を用意してくれてるっていうんだし、文句をいう筋ではない。

指定された住まいは、本社から電車で、一度乗り換えて30分ほどだった。駅を降りて、地図を見ながら知らない道を10分くらい歩いたら、中古のファミリーマンションが見えてきた。築20年か、もつと経っているかもしれない。ワンブロック手前にはコンビニもあったし、駅前は割と賑やかだ。ドアツードアで一時間以内で会社に通えるなんて、悪い話ではない。

部屋は301号室。同居の二人はもう、越してきているらしい。どうせ男三人だし、配属だって違っただろう。顔くらいは合わせるだろうが、そんなに面倒な付き合いはなさそうだと思う。ごみ捨てとか掃除とか、当番制にするのだろうか……。などと考えつつ、ドアチ

ヤムを押した。鍵は貰ってあるが、いきなり開けたら驚かれるかも知れないし。って、気を遣ったようできて、一階のエントランスは普通に逆マスターキーで入ってきてしまったが。

「へーい。誰？」

ドア越しにも、どすどすとうるさい足音を響かせた後、勢いよく開けてくれたのは、見るからに体育会系のごつい男だった。

「……お、俺、今日からここに住むことになった、杉崎です」

「えええっ！　なんだよ、男かよ！」

正直言って、この反応は想像でできなくもなかった。部屋の奥から、もう一人の声がする。

「だから言っただじゃない。女の子のはずはない、って。まさか男二人の部屋に女性を同居させると思う？　カオルは本当にバカだね」
「だって……、杉崎チカって……」

俺の名前は、杉崎千佳。チカじゃなくて、ユキヨシって読む。でも、チカって読まれるのはもう、漢字で名前を書くようになった時からずっと、で、慣れてはいるが……。さすがに、あからさまにがっかりされると、それなりにムツとする。

「よろしく、杉崎くん。ユキ……ヨシ？」

玄関に出てきたもう一人の男は、「千」の字は読めたらしい。

「うん。ユキヨシ」

「よろしく」

手を伸ばして握手を求めてきたので、仕方なく右手を出す。ひょろつと背は高いが、運動神経はあんまりなさそうな、眼鏡をかけた男だった。今更だが、俺の就職先は、割と大きな建設会社だ。この男は設計かなんだらう。そして、さっきの体育会系は、営業だと思っ。

「僕は七瀬優希。七つの瀬に、優しさに希望の希で、マサキ。八割方は、ユキって呼ばれる」

くすくす笑いが気持ち悪いが、同族意識は持ってしまう。

「おれは小清水薫。小さい清水に、風薫るの薫。つかさ、会社には女三人つて思われてんじゃね？」

「言えてるかもね」

「だからさ。間違つて、三人目は女が来るんじゃないかって、期待してたんだけどなー」

「そんなはず、あるかよ。」

「悪かったね」

一応返したが、小清水つてやつは全く意に返さない。身体を開いて、奥へと誘う様子に、ついそのまま上がってしまった。廊下の先がリビングで、ドアが二つ見える。もう一つの部屋はどこだろう？「とりあえず、僕たちがこっちの二つを使つてるけど、玄関わきの部屋でいいかな？」

七瀬に訊かれて、俺は頷く。

「あ、うん。どこでもいいよ。角住居だから、暗くもないだろうし」それに、他人とは少しでも離れてた方が暮らしやすそうだ。俺はもう一度廊下に戻り、部屋を確かめた。一つは外廊下に面した小さなものだが、二面に窓があり、採光に問題はない。八畳ほどの洋間で、思ったより広かった。総務の話通り、新品のベッドと机、本棚が置いてあつて、押し入れ替わりのクローゼットも大きめだ。

「そっぴゃ荷物は？ 引越しじゃないのか？」

小清水が訊くので、俺は今度は首を振った。

「場所を見に來ただけ。これからいったん帰つて、荷物まとめて明日にでも……あ、」

「どうした？」

「ダンボール数箱だと思っただけど、まとめるの手伝ってくれる約束で、今のアパートに知り合いを呼んでるんだった。じゃ、行くわ」ここから一時間はかからないと思うが……、待たせたら、それなりに悪い、と思う。

「へえー。彼女か？ ここには連れ込むなよ？」

「……女じゃないよ」

「男性でも、恋人の可能性はあるんじゃない？」

横から七瀬が口を出す。

「違うつて。そんなんじゃない……、とにかく、また明日」

俺は急いで、今のアパートに戻った。大学と同じ駅なのが取り柄だが、出口は反対側で、のんびり歩けば30分はかかる。建物は古いし綺麗でもないが、家賃は安い。そのアパートのブロック塀に、寄りかかっている男が見えた。すぐ横に、マウンテンバイクを停めている。

「悪い。待たせた」

声をかけたら、ぱつと顔を上げる。えーと、そんなに嬉しそうにされても、こっちが困るんだが。

「少し早く来た。約束の時間から、まだ5分ほどしか経っていない」

こいつの……といっても俺より年上だが……、言葉が硬いのは、日本人じゃないからだ。第二外国語の、スペイン語会話の講師だった。入学時は俺も夢を持っていたもんだから、将来は貿易関係に……などとボケた頭で考えて、第二外国語に選んだのだが、外国語学部ならともかく、一般教養みたいな第二外国語だ。大したことは教えてくれないし、こっちも勉強なんかしない。独仏はまだ人数が多かったけれど、クラスには15人くらいしかいなかった。ヒアリングの試験の後、答案を返ししながら『95点。もったいない。あなたはお風呂上りにビール飲みませんか？』と聞かれた。ビールの綴り『cerveza』を『cerbesa』かなんか、書いたんだと思う。だいたい日本人なんだから、lとrも、bとvも、cとsも耳で聞いただけで区別なんかつくもんか。綴りは頭で覚えるしかない。だから、知らない単語は書けない。俺はあいまいに笑って首を振り、答案を受け取った。あと別に、出来がよかったって訳でもない。簡単な単語ばかりだったし。

授業の後、何となく話しかけてみた。先生はビール好きなんです

か、みたいなことだったと思う。日本のビールは飲みやすい、とか言われたような気がする。そしたら、クラスの女子学生が帰りがけに『デイヴィッド先生、さようなら』って声をかけた。あいつは『さよなら。またね』って返した。で、俺はちよつと気になって、訊いてしまった。だって、スペイン語だったら、デイヴィッドじゃないはず。語尾についたdは発音しないって、自分でも教えてるじゃないか。何しろ、嫌でも『チカ』と呼ばれる俺だ。そういうのは気になる。

「えつと……、ダヴィ、じゃないのかな。デイヴィッドじゃ、英語読みだろ？ 嫌じゃないの？」

そしたら、あいつは少し驚いたような顔をして俺を見たが、首を振って答えた。

「どうせ、ガイジンだし。気にしない」

俺はちよつとムツとして、声が大きくなった。

「自分の名前だろ？ 気にしろよ。それに、教師なんだから、正しい読み方を教えてやんなきゃ」

「……うん。ありがとう。セニョール・スギサキは優しいね」

「優しくなんかじゃないよ。ただ俺も、漢字で書くと、しよつちゅう名前を変に読まれてるから。嫌なんじゃないかって思ったんだ」

「イギリスとかアメリカはみんな、デイヴィッドって呼ぶから、本当に、あんまり気にしない。でも、ありがとう」

国のことじゃなく、その国の人たちのことだろう。それまでとは全く違った表情で、柔らかく笑いかけてきた。俺は興味はないが、女の子なら、ぽうつとしたかもしれない。

「そうそう、漢字、難しい。スギサキ、ユキヨシ……、こういう字を書く？」

出席簿は、ローマ字で書いてあった。その横に鉛筆で、『千佳』と書いてやる。

「1000？」

「まあ、そうだけどさ。漢字ってほら、音読みと訓読みあるだろ…

…、わかんないか。いろんな読み方があるよな」

頷くのを見て、俺は続けた。

「それって、チカって読めるんだよ。女の子の名前みたいになっちゃう」

そしたら、やつは笑い出した。なんで外人にまで笑われるんだ、と、俺は不愉快になったのだが……。

「チーカ。可愛いね」

『chica』は、英語の『girl』だ。ますます頭に来る。もちろん、女の子、だなんて。

すっかりヘソを曲げた俺はそのまま帰ろうとしたのだが、やつが引きとめて、家でコーヒーを飲めと言う。前に、自宅でも教えている、みたいなことを言っていたし、気軽に人が来るところらしいと判断した俺は、何となくついていった。もしかして、クラスの女子なんかも行ったことがあるんじゃないか、って、軽く考えたんだ。連れて行かれた先は広めのアパートで、洋間に大きなダイニングテーブルが置いてあった。勉強しようと思えば、できそうだった。

そんで……、『語学を上達したいなら、その国の恋人を持てばいいよ』とかほざくから、『じゃあ誰か紹介してよ』って言い返した。同年の彼女とは、ちよつと前に、別れたばかりだったし。何しろ向こうは短大出で就職してて、まだ学生の俺は社会人の大変さがピンと来ず、今思えばこっちの我がままで、終わってしまったと思う……、まあ、それはどうでもいい。そしたらスルーされて、『会話を教えるから、漢字を教えてくれ』って言われた。部屋には子供の用の漢字ドリルもあったし、真剣なんだなと思って、俺は頷いたんだけど……。その後なぜか、告られたって訳。多分俺が、名前のことで怒ったのが、大いに影響しているんだと思う。とはいえもちろん、付き合ってたなんかいない。第一、『愛している。私のチーカ』なんて囁かれて、喜べるかって。

それでも、月一くらいで訪ねて行って、漢字の書き取りを見てやり、ちよつとした会話のレッスンをして、『続きはベッドで話そう』

とか言われて文字通りぶっ飛ばして、とつと帰ってくる。

「チーカの部屋に初めて呼んでもらったのに、出ていくところだなんて」

「うっせーよ」

喋っていたら、大家のオバちゃんが顔を出す。

「杉崎さんの知り合い？ さっきから知らない人がいるって思ってたんだけど」

「荷物まとめるの、手伝ってもらおうと思って」

「ごきげんよう、マダム」

ダヴィが軽く腰を折って、大げさに挨拶をする。オバちゃん目がまん丸くなった。

「あら、外人さんかい。お愛想でも、気分がいいねえ」

機嫌がいいのは、こつちも助かる。俺はやつの背を押して、アパートの階段を昇った。

六畳一間に台所と、後で増築したっぽい風呂と洗面所だけの、狭い部屋だ。家具は今度の部屋に備え付けだったから、要らないと思って処分して、服や本をダンボールに詰めるくらい。あとはノートPCを抱えて行けば、それで済む。一人で十分なのに、ダヴィがうるさかったので、見せてやれば気が済むかと思っただが。

つい、油断してしまったのかもしれない。部屋に入り、ドアを閉めたところで、あいつがずっと自分の眼鏡を外して、胸ポケットに入れた。背が高いし、肌も白いから、それだけでも日本人じゃないのは分かるが、瞳が綺麗な緑色なんだって、そのとき初めて気が付いたが……。腕を引っ張られ、思いつきり抱きしめられて、キスされた。ううーむ、確かに眼鏡は邪魔なんだな、などとバカなことを考えつつ、必死で押しのける。

「何、すんだよ！ ドタバタしてたら、大家さんに不審がられるだろ」

「先程の女性に知られて、チーカに不都合があるのか」

どうも違う風に受け取ったらしい。惘然として言い返すから、俺は呆れた。

「男とキスしてる変態って思われるよ」

自分で言っただけで、情けない。何で俺が。確かに、彼女いない歴が、もうすぐ二年になるうとしてるけどさ……。

「どうせ、もう出ていく。構わないだろう」

「俺の意思は無視かよ」

目を背けたところで、また捕まった。もう一度キスされて、また全力で押しのけた。

「今度やったら、殺すぞ？」

「ふむ。それは本望だね」

「……そんな難しい言葉、どこで覚えた」

02（前書き）

引越し当日。主人公はカオルの「姉」、ユキの「妹」と知り合う。
すでに総受状態……。

翌朝、あの部屋に越してきた俺は、玄関ドアの横の、普通は表札を取り付けるスペースを見て呆れた。『ゆき かおる ちか』と書いたボール紙が貼ってある。それも、汚い字だ。

「郵便とか、ちゃんと来なかったらどうすんだよ」

「一階の集合ポストに来るでしょ。君の分もちゃんと、姓だけ書いてあるよ」

七瀬が落ち着いた答えを返し、俺はやつと気づく。小清水は不満げだ。

「いいじゃん。可愛くて」

「小清水が書いたのか？ きつたない字だな」

「カオルって呼べ。ユキは、ユキでいいって。お前は、被るからチ力な」

「チカが、ユキでもいいけど。その場合は僕のことを、七瀬さんって呼んでくれる？」

「やなこった」

俺が何か言う前に、小清水が言下に打ち消した。俺より数日、付き合いが長いだけだと思うが、いいコンビだ。

「じゃ俺、荷物片すんで……」

こいつらと遊んでたって、しょうがない。来週からは仕事だし、居場所を早く作らなくては。俺はそのまま、自分の部屋に入ろうとしたが、奥のリビングが目に入り……、そのまま固まった。ダイニングテーブルのところに、女の人がいた。こつちを見て、くすつと笑ったような気がする。

「……誰？」

うっかり、声が出たらしい。小清水が、隣で大声を出す。

「おいタマキ、珍しがられてるぞ。挨拶くらいしろよ」

「姉さんって呼びなさい。カオルの姉の環です。よろしくね。様子見に来させてもらったの。迷惑だろうから、今日だけね」

「あ、いえ……」

落ち着いた、少し低い声だ。弟は要らないが、こういう人は毎日いてくれていいんだけど。女優さんみたいな化粧に巻き髪で、歩いてきたらワンピースの裾がひらひらして……、香水だろうか、いい匂いもする。ちょっと背が高すぎる気もするが、モデル体型なんだと考え直した。

「気をつけるよ、チカ。こいつはお前みたいなのが大好物だからな」
小清水が注意してきて、七瀬も横で頷いた。

「チカは、分かってないんじゃない？」

「分かってないって、何が？」

俺の問いには答えず、小清水が両手を打ち合わせる。

「あつ、そうか」

「ダメよう、カオルったら」

赤いルージュの唇が、色つばく動いた……、が……。

「タマキはおれの、双子の兄だから。男」

「……」

ふんわりした気持ちだが、一瞬で打ち砕かれた。七瀬が親切にも、追い打ちをかけてくれる。

「良かったね。填まる前で」

「酷いわ。可愛い子だと思ったのに。カオルみたいにむさ苦しくないし、ユキなんか一目で見破っちゃって、視線が冷たいし……」

「女性の格好なんかするからですよ。そういう人には、興味ないんだ。環さんは、素でもきつと綺麗だと思う。それで迫られたら、僕もどうなるか分からないな」

どこまで本気なのか、こっちも分からないよ。

「あら、そうなの？ 嬉しいわ。でも……、お化粧もしたいしスカートもはきたいし、ジレンマだわ……」

勝手に悩んでくれ。俺は管理人に借りた台車にのつけてきたダン

ボール箱を、部屋に運び入れる。

「手伝おうか？」

七瀬が一応、声をかけてきたが、首を振った。

「荷物、少ないし。一人で大丈夫だよ」

「でもさ、皆でやればすぐ終わるんじゃない？」

小清水が出しゃばってくる。環さんは勝手に俺の部屋に入って、窓を開けた。

「最初に、掃除機かけた方がいいわよ。アタシができるのは、そこまでだけ」

確かにあの長い爪じゃ、力仕事なんか何もできそうにない。俺が何も答えないうちに、廊下の物置から掃除機をひっぱり出してきて、床を一回りかけてくれる。四角い部屋を丸く……どころか三角な気もするが、しないよりはずっといいのだろうか。

「ったく、雑なO型だな」

「お黙り。そんなごついなりしてるくせに、血液型を気にしてるなんて。これだからA型って嫌いよ」

やっぱり兄弟だなと思って見てたら、七瀬が腕を組んで、何か考えていた。

「どうしたんだ？」

「うん。これでいいや」

いきなりダン箱の上に、図面を書きだす。それから、小清水を手招きした。

「最良の家具配置。こうしてくれる？」

「オッケー。タマキは役に立たないから、向こう行ってな。おいチ力、やるぞ」

俺の部屋だつていうのに、勝手に決められてしまった。まあ、深く考えてなかったから、いいけど。置いてあった机と書棚とベッドを動かし、持ち込んだ本を並べ、クローゼットに服をかけて……、一時間もしないうちに終わった。

「ど、どうも。おかげで早く終わった」

「引越し祝いしようぜ。チカのおごりで」

小清水が勝手なことを言う。隣で七瀬も頷いている。

「ええーっ。酷いじゃんか」

「そうよ。可哀想だわ」

環さんが助け船を出してくれたが、小清水は嫌味な口調で返した。
「じゃ、タマキのおごりか？ 定職に就いてないやつにや、無理だろ」

「……モデルのお仕事、してるじゃない」

「それで飯食えるようになってから、威張るんだな。……じゃ、四人で割り勘にすっか。出前の寿司とって」

言葉はきついが、後腐れはないようだ。皆で同額を出して出前を頼み、俺が台車を返しがてら、コンビニに飲み物を買に行くことになった。

引越し屋のサービスで、午後からの、荷物少ないパックだったから、もう夕方だ。買い物して戻ってきたらもう、管理人室はカーテンが引いてある。5時までの勤務らしい。

エントランスのインターホンの前に、振り袖姿の少女が立っていた。ワンピースの綺麗なお姉さんは、お姉さんじゃなかったが……、この子は女の子だろう。12、3歳に見えた。七五三にしては大きいし、成人式にしては幼すぎる。第一、時期も違う。しかし、普通に街中を、着物姿で歩くものだろうか。

……だが、行きずりの他人だ。興味を持つ必要はない。

「こんにちは」

深い意味はなかった。エントランス内の掲示板に、挨拶励行、って書いてあったし。そしたら、その子は俺を見て、口を開いた。

「あのう、これ……、わからないの」

オートロックに戸惑っていたらしい。可愛いもんだと思う。

「誰かの家に、遊びに来たの？ 部屋番号押して、呼び出すんだよ」
不審者と思われるから、あえて明るく教えてやる。

「何号室？ 押してあげようか。出たら、自分で話してね」

「301」

……俺の部屋だ。

「ええつと……、小清水か、七瀬の知り合い？ 俺も住んでるところだけ」

「七瀬ミサオといいます。美、佐、緒」

一文字ずつ、指で空に字を書く。

「美佐緒ちゃんか。じゃ、一緒に行こう」

少々若すぎるが、可愛い妹がいるのは悪くない、というか羨ましい。ちなみに俺は一人っ子だ。

「ただいま。おい七瀬」

「ユキ。でなきゃ、七瀬さん」

玄関で声をかけたが、返事の代わりに、命令が来た。

「……ユキ、妹さんが来てるぞ。美佐緒ちゃん」

「僕に、妹なんかいないよ」

それでもやつは出てきて、美佐緒ちゃんを冷たい目で見下ろす。

「何だ、その恰好は」

「酷いよ。優希お兄ちゃん」

仲が悪いんだろうか？ 顔はそんなに似ていないが、落ち着いた感じで、よく言えば品のある、雰囲気は似ている。知らない訳でもないみたいだし、もしかして、腹違いとか……。俺がそんな妄想をたくましくしていたら、環さんが顔を出した。

「あら、可愛い。こちらが噂の美佐緒ちゃんね」

「噂の、って？」

「ユキがアタシを男だっと思ったのは、自宅にもそんな子がいるからなんだって、ちょうど話してたところなの」

「じゃあ……」

俺は恐る恐る、美佐緒ちゃんを見た。この子も、男なのか？ どう見ても、少女なんだが。声だって、細くて高い。

「日本舞踊やってるからね。綺麗だからって、振袖なんか着たがって。呆れたものだよ」

「おうちのお仕事なのに、優希お兄ちゃんが嫌がるから……、ボクが……」

「ふうん。口答えするのか」

やつの言い方は酷く冷たくて、思わず顔を見てしまったくらいだ。振り返ってみたら、美佐緒ちゃんは泣きそうだった。

「ごめんなさい」

それだけ言ったところで、ぽろりと涙がこぼれる。

「泣くな。鬱陶しい」

「いくらなんでも、子供に向かって言い過ぎ、」

俺が口を挟んだら、七瀬が首を振る。

「いいんだよ。こいつはドMだから」

「ドMって……、そんなはず、ないだろ。苛められても我慢して、そっちのことを慕ってるだけじゃないか。もっと優しくしてやれよ」

俺がむきになって言い返してたら、美佐緒ちゃんが……美佐緒くんというべきか……美佐緒でいいか、後ろからシャツの裾を引いた。

「ありがとう、お兄ちゃん。でも大丈夫、ボクが悪いんだ。……ごめんなさい、優希お兄ちゃん」

「分かればいい。それから、チカに色目は使うな。わざとらしく、服の裾なんか引くんじゃない」

「い、色目って何だよ」

「美佐緒を、ただの子供と思わないことだね。油断大敵だよ」

物騒なことを言うやつだと思って、もう一度、美佐緒の顔を見た。涙で潤んだ瞳が光って、一瞬、惹き込まれそうになる。環さんの唇と同じ、魔力がありそうだ。

「言った端から、これだ」

七瀬が……もう面倒だから、ユキと呼ぼう……、美佐緒の襟首を掴んで引きずり寄せる。

「裸に剥いて、表に放り出そうか？」

「止めて、優希お兄ちゃん。ボクは何も……」

美佐緒は泣き出してしまい、見かねたカオルが間に入った。

「おれが相手をするよ。耐性あるし。ほら美佐緒、こっち来い。おれはカオルだ。こっちの化け物は、タマキ」

「ちよつとカオル、何よ化け物つて」

「カオルお兄ちゃんは、顔は怖いけど優しいそう。タマキお姉ちゃんは綺麗だね」

子供らしく、すぐ気が散っている。少し、ほっとしたが……。

「チカお兄ちゃんは……、大好き」

ユキがつかつかと歩み寄り、いきなり美佐緒の頬を打った。ピシツと、乾いた音が部屋に響く。

「チカに色目を使うなど、言っただはずだ」

「おいユキ、今のはやりすぎだぞ」

美佐緒を庇うように抱いて、カオルがユキを責める。

「カオルには分からないんだよ。チカも。こいつは性悪なんだ」

「全く。いくら自分が、チカのこと好きだからって、子供にまで……」

……

「カオル？」

「やべっ……」

ユキのきつい言い方と、焦ったようなカオルの態度に、俺は嫌な予感がした。まさか、な。

「冗談きついで。二人とも、俺をからかうのは止めてくれよ」

無理にそう言ったが、場の空気は全く解れなかった……。

03（前書き）

ユキと二人きりで、部屋に残されたチカ。少し、危ないような気がする。

まだ何も注文はしてなかったから、カオルと環さんが、美佐緒を連れ出してくれた。ユキと二人で残るのもまた、居心地が悪い。

「さっきの話だけど」

ユキが口を開き、俺は緊張しながら続きを待った。

「僕は美佐緒が嫌い、鬱陶しいから言い過ぎた、とは思う。チ力のことは、好きか嫌いかわええば好きだ。カオルもそうだよ。そういう認識で、受け取ってくれる？ あんまり、気にしすぎないでくれるかな」

「……うん」

「それから、美佐緒には本当に気を付けて。お弟子さんなんかでも、あいつに誑かされた人が、何人もいるから」

「穏やかじゃないな。子供に、何ができるんだい？ あと、お弟子さんって？ さっき、日本舞踊がどうか言ってたっけ」

少し気が軽くなって、俺は逆に問いかけた。

「実家がね、日本舞踊の家元なんだよ。そんなに、大きい訳じゃないけど。そして僕は、全く興味がない。十歳くらいまでは嫌々ながら稽古してたけど、美佐緒が生まれたから助かった……って、思ったんだけどね。君も見ただろ？、あの目つき。根っからの娼婦さ。おまけに、きつい言葉を浴びせれば、逆に嬉しそうな顔をする。美佐緒に引つかからないで済むのは、僕か、環さんみたいな人くらいだろ」

「そう……、なのかな……」

いまいち分からないし、分かりたくもない。ただ、まあ、あんまり近づかない方がよさそうなのは理解した。美佐緒にも、ユキにも。

そのとき、ポケットの携帯が鳴り出した。表示されたダヴィの名前を見て、俺は少しうんざりするが、一応出た。

「チーカ？ もう終わった？」

「何だよ。今、作業中」

とつくに終わったが、とつと切りたくてそう言う。ユキが面白そうに、こっちを見ていた。

『手伝いに行く？』

「いいよ、来なくて。じゃ、忙しいから切るぞ」

シンジラレナイとか、ヒトデナシとかわめいていたが、無視して終話ボタンを押す。

「チカが、そんな態度をとるなんてね。意外だな」

「面倒くさかったただだよ」

「それでも、少し嬉しいかも。僕との会話を優先してくれたなんて」「ふざけんなよ。好きとか嫌いとかじゃないって、言ったばかりだろ？ ユキまで、あいつと同じようなこと言うのかよ」

つい、言わずがなのことまで、口に出してしまう。

「ふうん。今の電話の相手って、そういう仲なんだ」

「だから、そんなんじゃない……、おい！ 返せよ」

ユキが素早く、俺の携帯を奪った。勝手に着信履歴を見て、軽くあごを上げる。

「David、ね。外国人か。デイヴィッド？」

「ダヴィ。つたく、ひとのものを」

取り返したが、ユキは悪びれた風もない。

「まあ、いいか。アドバンテージは僕にある。……どっち側？ っで、愚問か。チカは見るからに、受くさいからな」

「おい、何だよそれ」

だがあいつは、初めて会ったときと同じように、くすくす笑うだけだ。

「カオルのことは、心配してない。環さんも、チカのことは可愛がるだろうけど、大丈夫だろう。危ないのは、美佐緒だけだと思っていたが……、ライバルがいたとはね。参ったなあ」

参るのは、こっちだ。言ってることが、ちつとも分からない。

「ところで、もう配属は聞いた？」

話題が変わったのはありがたいから、普通に答えた。

「都市再開発部、っていったかな。何すんだろ。そっちは？」

「僕は設計。一応、院卒で、一級建持ってるからかな」

「えっ……、じゃあ、年上だったのか？ だったらやっぱ、七瀬さんって呼んだ方が……」

「飛び級だからね。年は同じじゃない？ ユキでいい」

何年、飛ばしたんだよ……。こいつ、本当に頭がいいんだ……。

「カオルは？」

「営業っていうか、エンドユーザー相手の販売部門って言ってた」
「へえ」

あいつは元気がいいから、そういうのも向いてそうだなと思う。

「チカが、そこならよかったのに」

「俺が？」

「うん。女の子ばかりだから、安心なもの」

「どういう意味だよ」

女子社員が多い部署なら、希望する男も多いような気がする。だが実際、女が集まったら怖そうだな。ちやほやしてくれるところか、俺なんか思いつきり、パシリにされるのが目に見えてる。

「浮気の心配がないってこと。チカはフェロモンまき散らしてるからね、環さんも興味持ってたし、美佐緒まで食いついてきて」

「何が浮気だよ。俺は誰とも付き合ってないし、それに、その喋り方じゃ、俺が男を引き寄せてるって言わんばかりじゃないか」

「だって、現に今、ミスター・デイヴィッドと……」

「ねーよ。あいつも男だし」

「ふうーん。良かった、って考えていいのかな。とにかく、これからよろしくね」

「あ、ああ……」

これまた、油断だった。話を打ち切りそんな様子だったから、つ

い、気を緩めたところで、ユキが顔を近づけてくる。

「おい……、近い、近いって……」

軽く重ねただけだったか、唇を合わせられた。俺は思いつきり、後ろに反って逃れる。

「なん、だよ……もう……。ふざけないでくれよ。眼鏡も外さないから、こんなことするなんて、予想もしな、」

「チ力」

ぼやいた俺に、やつがきつい目を向けてくる。さっきの、美佐緒に対する視線と同じだ。怯えるのも腹立たしいから、俺は虚勢を張って見返した。

「あー？」

「今の言葉は……、君には、眼鏡をかけた恋人がいる。キスするときには、彼は眼鏡を外す、ってことかな？」

「……。何で、男にすんだよ。違うかもしれないだろ」

「女性なら、そんな否定の仕方はしない。不愉快だな」

こっちだって不愉快だ。何でこいつは、こんなに態度がでかいんだろう。まるで暴君じゃないか。

ユキは素早く片手を伸ばし、俺の手首を軽く掴んだ……。と思っただが。もう、ぴくりとも動かさなかった。

「放せよ。今度は何を……」

「挨拶代わりに唇だけのキスを、って思ってたけど。」ご希望通り、眼鏡は外すね」

空いていたもう一方の手で、ずっと自分の眼鏡を外す。その隙に振り払おうと力を入れたが、やっぱり無理で……。おまけに、無理だと気づいて力を抜いたところを引っ張られ、文字通り抱きしめられていた。

「合気道の練習みたいだな。相手の力を利用して、って」

ああ、そういうことか。うっかり納得していたら、もう一度唇が重ねられる。今度は触れるだけじゃなくて、ねっとりとした感触の

舌がこつちに挿し入れられてきた。

「……やつ、やめ……ろ……」

「愛してるよ、チカ。彼とは、どこまでいったの？ まあ、すぐに忘れさせてあげるけど」

「じょう、だん……じゃない。俺は男なんか、と……」

「キス程度か。それに、今の反応じゃ、回数も少なそうだね。僕に任せて？ うんと、よくしてあげる」

「い、要らな……、う、うう……」

何て言ったらいいのか。無味無臭のキスだった。ぬるついた舌が入り込んで、口腔内を舐め回す。それだけ、なんだが……、抵抗する気が失せていく。そのことに気付いた俺は焦って、必死で暴れた。「大人しくしてないと、お仕置きだよ。痛くして欲しいの？」

「今すぐ、放せ！」

「あっそう」

もちろんそれは言葉だけ。放すどころか、俺を引きずるようにして、ダイニングテーブルの上に押し倒す。

「何しやがる」

「うん？ ふふっ……」

のしかかられて動けないでいたら、ジーパンの、つか下着の中に、手をつ突っ込んでくる。細い指があれを触って……、このまま逆らわないでいたら、きつと、すぐ気持ちいいに違いない……って、頭の中で、俺が俺に話しかける。ずるずる引きずられ、墜ちて行きそうだ。

「いやだ！」

最後の気力を振り絞って、叫んだ。ユキはぼかんとして、俺を見ている。だがまた、元の表情に戻った。

「本当に、嫌？」

もう、駄目かもしれない。そう思ってしまう。

「何、してんだよ」

低い声。カオルだ。

「お帰り。早かったね」

ユキは、平気な顔で言い返す。

「邪魔だった、って言いたいのか？」

「そんなこともないけど。それとも、ジェラシーかな」

「ふざけんな。いくら手前でも、ぶつ飛ばすぞ！」

カオルは大きな声を出し、ユキから、俺を引き離した。

「ユキが誰に興味を持とうが構わんけど、嫌がってるのを無理強い
つてのは、俺は我慢できねえな」

「ごつい指先が、目じりを撫でていく。そのとき初めて俺は、自分
が涙ぐんでいたことに気付いた。

「チカは、そんなに女々しい奴じゃないだろ。そいつを手前は、泣
かせたんだぞ」

「カオルも、チカに興味あるの？ 意外だな」

「ユキ！」

カオルに怒鳴りつけられて、さすがのユキも肩をすくめた。

「……ごめん、カオル。チカも。……冗談ってことでいいよ」

04（前書き）

「僕と一緒に健康的な汗をかこうよ」「ふざけんな、ユキ」「部屋の掃除をしようって誘ってるんだけど」「……」

「大丈夫か？」

「……うん、何とか」

カオルに慰められてるのも、格好悪い。

「ユキも多分、引っ込みがなくなっただと思う。美佐緒が現れたことで、動揺したんだろう。嫌がつてるのを無理に襲うような奴じゃない」

「それって、やっぱ……男が好きってこと……？」

俺の問いには、カオルは言い難そうに、横を向いた。

「多分、な。でもほら、実害はないから。少なくとも、ガキができるとかそういう心配は」

「何、言ってんだよ。今ので十分、実害だろ」

「はははっ……、そうか。そうだな」

カオルは頭をかき、キッチンの冷蔵庫を開けて、中を覗き込む。

「お前ら、飯まだだよな。俺が特製チキンライスをご馳走してやるよ」

「……冷凍食品じゃねーか」

俺の突っ込みは無視して、目分量で二枚の皿に盛る。ラップをかけ、電子レンジのタイマーをぐるぐる回した。

「半分ずつ食え。……おいユキ！ チカが、仲直りに飯食おうってさ」

「……いいよ。食欲ない。カオルが食べておいて」

声を張り上げて呼んだが、ドアの向こうから、力ない返事が聞こえる。さすがに顔を合わせ難いから、それはそれで助かるんだが……。

「おれがチカを食っていいのか？」

「だめ！」

すごい勢いで、ドアが開いた。とても分かりやすい。対象が自分

じゃなければ、きつと面白い……、と思う。

俺たちがもそもそ食っていたら、カオルがまた冷蔵庫を開け、卵を二つ取り出す。どうせなら食べる前に出してくれば、オムライズにできたのに、と思ったが、鍋に割り入れてしまった。紙パックの牛乳も足して、ガスの火をつける。

「何作んだ？」

「んー」

砂糖の袋を出してどさどさと入れ、マグカップを三つ並べた。

「ほい。ミルクセーキ」

「……風邪ひいた子供かよ」

「ありがとう」

俺は呆れたが、ユキが礼を言つてカップを取り上げる。カオルが気を遣つてくれたのだと理解した俺も、もう一つを手についた。非常に甘い。

「飲んだら、歯磨いて寝ろよ」

「ごつつい母さんだな」

俺が言い返したら、カオルも笑う。

「うつせえ。あとユキ」

「うん？」

「チカに夜這いかけんじゃねーぞ」

ミルクセーキを噴きそうになり、何とか堪えた。

「はいはい。僕の部屋には鍵かけないで置くから、いつでも来ていいよ」

こつちを見て言ったのではない、と、無理やり思い込む。実際、俺よりはカオルの方を見ていた気がしなくてもない。わざと目を逸らしたのかもしれないが。

翌週の月曜は入社式。全社での新人研修が三日あって、俺たちは各々の配属先に放り込まれる。

仕事が始まったら、三人は休みもバラバラになった。ユキは普通に土日休み、カオルは水曜定休で、前後どっちかをつけて連休らしい。俺は……、再開発部っていうのは、どうも窓際的な部門だったらしく……、やたら役職のついたおっさんばかりで、何をしたらいいのかも分からない。基本的に使い走り、講習会に出るとか、週末に販売応援を頼むとか言ってこられると、それは全部、俺。つて訳で、水曜と土日のうち、いつが休みなのか分からない状態。それでもまあ、サービス出勤を命じられないだけ、マシなのかもしれない。

今週は、土日が休めることになった。とはいえ、何の予定もない。ゴロゴロして過ごすだけだろうと思う。

だが、土曜の朝。俺の部屋のドアを、誰かが……って決まってるが……、ノックしてくる。

「チ力？　一緒に食事しようよ」
「うーっ」

食費はそれぞれ同額を出して、ある程度のものはいつも冷蔵庫に入っている。冷凍食品と飲み物くらいだけ。ちゃんとしたものが食べたかったら、外食がコンビニで十分だ。

ぐずぐずしていると襲われそうな気もするから、俺はちゃんと着替えて出て行った。ユキがコーヒを淹れてくれたので、有難いだけ。どこかで買ってきたのか、クロワッサンを軽く温めて出してくれた。さくさくしてて、美味い。

「明日も休み？」

「……ああ」

「じゃ、今日は掃除しない？　ここの」

「へっ」

ねっとり過ぎそう、などと言われたら、ぶっ飛ばしてやろうと思ったのに。まともな発言で、逆に驚いた。

「窓開けて、掃除機かけてさ。今のうちから綺麗にしておけば、大

掃除も要らないし」

「う、うん」

拒む理由もない。もう一か月くらい経ってるし、誰もタバコは吸わないが、リビングの壁紙もたまには拭かないと汚れていそうだ。

「始めようか」

ユキが立ち上がり、自分の部屋のドアを開け放す。窓も開いていて、爽やかな風が通り抜けてきた。と、いうか。それまで避けてたから、ユキの部屋なんて、ちゃんと見たことがなかったのだ。

「青いんだな、部屋ん中」

「よく見る？ 入ってよ」

「いや……、いい」

ユキの部屋は散らかってなんかいないって言うから、俺の部屋だけだがざっと片付け……、リビングの天井や壁を軽く拭いて、掃除機をかけ、だいぶすつきりした。

「カオルの部屋も、掃除してやるって言えばよかった。鍵、置いてったかも」

だが、ユキは首を振る。

「カオルは綺麗にしてるよ。平日休みのとき、掃除してると思う」

「へえ。意外だな。……どんな部屋なんだろ」

「見る？」

見る、って。どうやって？ きょんとしていた俺の腕を引っ張り、ユキが自分の部屋を通り越して、バルコニーに出た。

「えええつ？ なんだよ、こっちってバルコニーつきなのか？」

「何を今更。その分、君の部屋は二面に窓があって、少し広いじゃない」

もっと文句を言ってやろうと思ったんだが、それよりも、バルコニー側から見えるカオルの部屋の様子に、俺はぶったまげた。カーテンはピンク色で、白いレースのカーテンの裾には、可愛らしく丸い玉がついている。つい覗き込んでしまったベッドも童話のお姫様のような金色のフレームで、白とピンクのファブリックに覆われて

いた。

「なん……だよ、あれ……」

「カオルは少女趣味なんだ。特技はお菓子作り。普通の料理も、あの程度はできるんじゃない？ さっきのクロワッサンも、そうだし」
だから手早く、ミルクセーキなんか出してくれたのか。意外、なんて一言じゃ済まない。

「いつまでも覗いてても悪いから、戻ろうか」

確かに、そうだと思い、俺は頷いて、窓からユキの部屋に入った。だって、そこを通らなきゃリビングには戻れないし、毎度の油断なんだろうが、あいつも、特に変なところはないかったんだ。

「窓、閉めようかな」

「うん、もういいんじゃない？」

短い会話をしたから、足が停まっていた。そこでユキが、俺を軽く押す。

「何すんだよ、おい」

目的は、分かりきっている。バランスを失って倒れていく先は、深い藍色のカバーがかかったベッドだ。やつは俺に絡みつくようにして、一緒に横たわった。

「止めろって」

「僕の部屋も、見ていくといい。ベッドからになるけど」

「遠慮させる」

この前のことがあるから、俺も無駄に暴れたりしなかった。隙を見て逃げた方がいいと、知恵はついている。

「抵抗しないんだね。その気になってくれたのは嬉しい」

「……つとに、自分に都合よく受け取るやつだな。力押しで敵わないのは、もう分かっているからだ。それに、カオルも言っていた」

「カオルが？ 何を？」

動揺したのか、少し声を上ずらせて訊いてくる。

「ユキは、嫌がってる相手に、無理強いなんかするやつじゃないって」

「……そう」

「だから俺に、乱暴なんかしないだろ。……信じてる」

微かな舌打ちが、聞こえた気がする。そして、俺を押さえていた腕の力はもう、抜けていた。

「くっ……、そう来たか。参ったな……。でも、僕が理性をかなり捨てて、君を襲ったらどうする？」

「そのときは、死ぬ気で暴れる」

「ううん。チ力は僕の情熱に応えてくれるよ、きっと」

それが、今じゃないらしい、のだけが救いだ……。

「ほら、起きて。いつまでも寝てたら、誘ってるのかって、僕が調子に乗るよ？」

すごい理屈だ。自分が押し倒したくせに。上手い返しが思いつかず、俺は黙って起き上げる。

「でも、これくらいはいいのかな。いいよね？」

何がいいのか、一瞬、気付けなかった自分が悔しい。やつは眼鏡も外さなかったし。素早く顔を近づけてきて、こっちの唇を軽く噛んだ。驚いたところで頬を押さえ、唇を重ねてくる。

「ディープなキスには、確かに眼鏡が邪魔だな。この程度にしておこうか」

「……その前の段階で、思い直せよ」

「遠慮しなくていいのに」

うるさく誘うから、夜はユキと食事に出ることになった。都心の繁華街まで足を延ばして、久しぶりに、気分だけは遊びだ。

「腹は膨れたけどさあー。土曜の夜に、同じ会社の男と二人で飯かよ」

「僕は嬉しいよ」

聞き流して、外に出る。普通の男だったら、『ナンパでもしようぜ』と、それこそ口だけでも言ってみるんだが。こいつじゃ、なあ……。何の気なしに、周囲に目をやった……。俺の視線が、留まった。

「どうしたの？」

ユキも気づいて、そっちに目を向ける。背の高い外国人の男が、女の人と話をしていた。ダヴィだ。そして向こうも俺を見つけて手を振るから、仕方なく歩み寄った。

「デート中？ 邪魔じゃないの」

微妙に声が尖っているのが、自分でも非常に腹立たしい。

「ノウ。この人は、奥さん……、ex-mujer、何と言う？」

「それを私に訊くの？ ラモン」

「ラモン、って何だ？ ミドルネームか？ 女の方は笑って答えず、逆にダヴィに聞き返す。

「生徒さん？」

あいつは何か言いかけたけど、結局、黙って頷いただけだった。

日頃あんなに迫ってきたくせに、女性に訊かれれば、ただの『生徒さん』か。有難いくらいなんだけど、やっぱりどこか面白くない。

そしたら、ユキが俺の腕をとった。

「帰ろう。チカ」

「チカ、お友達？」

ダヴィが訊いたが、ユキが首を振る。

「どこまで日本語が通じるのかな。でなきゃ、そちらの方に通訳をお願いします。僕は今、彼と一緒に暮らしてるんだ。そういう関係」
確かに、間違っではない。だが、非常に誤解を受けそうな表現ではある。そして思いつき、感情も入ってる。

「おい、ユキ」

「チカは黙ってて！ 逆らうなら、引きずってでも連れて帰るよ」
別に俺は逆らいもせず、ユキが停めたタクシーに押し込まれて、そのまま帰った。

部屋に戻って、ダイニングテーブルにつく。ユキがコップに、ミネラルウォーターを注いでくれた。

「exって、元とか、前の、って意味。あいつ、バツイチだったん

だな」

「ぼそぼそと、呟きが口から出ていく。さつきは、とっさに思い出せなかった。」

「そうでもなかったら、こんな極東まで流れてくるわけないか」

「軽く笑って顔を上げたが、ユキがじつと見つめていたから、思わず目を逸らす。」

「僕は、チ力にこんな顔をさせた、彼を許さない。僕なら誰にだって、チ力を愛してるって言える」

「いや……、それは別に、言ってもらっても嬉しくな……」

「ただ、ちよつと驚いただけ。何も知らなかった、何も教えてもらえなかった自分は……、それこそただの『生徒』の一人だったんだって思い知って、少し……何て言ったらいいか、自分が可哀想なだけだ。」

「そのとき、コトン、と小さな音がした。ユキが眼鏡をテーブルに置いたのだと気が付いたのは、唇を重ねられてからだだった。今度のキスは、深くて、長い。そして俺には、反抗する気力もなかった。……だけど、それだけだった。」

「今の君なら、簡単に僕のものにできる。でも、無理強いも……、弱みに付け込むのも……、嫌いだ。自分の真面目な性格が、いつそ憎らしいよ」

「……どこが、真面目なんだよ」

「言い返す元気はあるんだね。じゃ、自分から誘ってごらん。寂しいから、今夜は一緒にいて欲しいって」

「絶対に、言うもんか」

「ユキはくすくす笑って、俺の背中を押した。部屋に入り込む気までは、ないようだった。何となく、あいつを見直してしまう。」

05（前書き）

今週は平日休み。カオルが、女の子と遊ぼうと言って連れ出してくれた。ちよつと嬉しいチ力だったが、衝撃の事実を知ってしまう。

翌週は水曜が休み。寝起きのぼさぼさ頭のまま、俺がキッチンで水を飲んでいたら、カオルが部屋から出てきた。

「おはよ」

「おう。お前も休みだったのか。死んだように寝てんだな、音もしないから、いないのかと」

「うつせえ。出かけんのか？」

大した格好ではないが、いつものＴシャツと短パンではない。カオルは頷いて、腕の時計を見た。

「まだ間に合うな。おい、お前も一緒に行くぞ」

「何だよ。どこに」

「同期の女たちと、映画見に行くんだよ。ほら早く、顔洗え」

「えー」

とはいえ、別に嫌ではなかった。こうして誘ってくれるのも、有難いくらいだ。言われた通りに着替え、適当に髪を撫でつけていたら、カオルが誰かに電話をしている。

「もう一人連れてく。いいだろ？ 誰って、チ力だよ。チ力。知らねえ？ ……あー？ 何言ってんだよ、そんなんじゃないやねえって」

多分、女性だと勘違いされたんだろうな。だいたい、推測はできる。

集合場所には、派手な格好に濃い化粧の女の子が集まっていた。

華やか、というか、怖い。

「チ力を連れて行ってくてカオルが嬉しそうに言うから、いつの間に彼女ができたのかと思ったのに」

「ねー」

俺は非常にびびっていた。環さんが厚化粧だと思っていた頃が、いつそ懐かしい。

「大人しいのね」

「怖いんだろ。恐ろしい女たちに囲まれて」

「ひどーい」

カオルは愛嬌があるし性格が明るいから、女性には人気があるようだ。

レディースデーってこともあって、映画はおごらされた。

「男一人じゃなくて、助かった」

「俺はお前の財布じゃないぞ」

女の子たちはけけら笑い、お茶しに行こうと言い出す。

「飲み食いした分は、自分で払えよ？ だいたい、貰ってる給料は同じじゃねえか」

小洒落たフルーツパーラーに入り、少々高めのメニューに困りつつも、無難に生ジューズを頼んでみる。その頃には雰囲気も解れて、普通に彼女たちと話ができるようになっていた。

「こんな風に、みんながよく遊んでんの？」

「そうでもないわ。でも、学生のときの友達とか、休みが合わないもん」

「カオルは安全だしね」

「……どういうこと？ 女の子の方が、数が多いから？」

訊き返したら、彼女たちは顔を見合わせた。カオルが急に、口を挟んでくる。

「チカは耐性がないんだから、余計なこと言うなよ？」

「余計なことって、何だよ」

「当のカオルが余計なこと、言ってるんじゃない。それに、チカちゃんも同じ部屋に住んでるんでしょ」

俺は、『チカちゃん』じゃない。いや、それより。

「訳わかんね。知らないのって、俺だけってこと？」

「ほらあ。怒らせちゃったわよ」

カオルが黙り込んだので、別の女の子が口を開く。

「カオルって、ユキと付き合ってるらしいの。だから、女の子には興味ないって訳。でも、チカりんには秘密だったのね」

『チカりん』でもない。

「っていうか、鈍くない？ 何で気づかないの？」

「大きなお世話だよ。それより、本当なのか？ カオル」

問い詰めている口調が、自分でも嫌だ。カオルのやつが返事をしないから、女の子たちが取り成すように、口々に話し出す。

「いいじゃない。私たちがいるんだから」

「チカは、女の子の方がいいんでしょ？」

「やっとな、『チカ』になった。せめてこれで、固定してくれと思う。」

「……あ、うん。でも、何も知らなかったと思ったら、腹が立ってさ。ごめん」

一応、謝ったら、彼女たちはほっとしたような顔になった。何も女の子が悪いわけじゃないのに、気を遣わせて済まなかったと思う。また、チカが水曜休みのときに、誘うわ。みんなで遊びましようよ」

「うん」

「悪い。帰る」

いきなりカオルが立ち上がり、俺の腕を引っ張った。

「な、なんで俺も……」

帰る場所は、同じだけどさ。

「ちゃんと話して、仲直りするからさ。次も、俺も混ざっていいだろ？」

「チカが、いいって言ったらね」

「それは大丈夫」

カオルが自信ありげに言うと、彼女たちは重々しく返してくる。
「身体で説得なんか、するんじゃないわよ？」

……やっぱり、女は怖い。何てことを言うんだろう……。

俺たちはほぼ無言で、部屋に戻った。カオルがまた俺の腕を引っ

張って、テーブルにつかせる。振り払ったが、それでも、座ることは座る。やつは俺の正面に回り、まっすぐにこっちを見た。

「黙ってて悪かった。言い出せなくて」

「……いや、いいよ。カオルには、何をされた訳でもない。逆に、親切にしてもらってる。でも、何なら……、出ていくけど」

「止めてくれ！ おれは……、おれたちは、お前が好きなんだよ。

えっと……、色んな意味で。おれなんか実際、お前を抱こうとは思わな、」

最後まで聞きたくなくて、素早く耳を塞いだ。感じのいい兄貴分だと、思っていたのに。

「俺に直接、害がない限り、誰が誰と付き合おうが興味ないし、偏見もないつもりだけどき。どいつもこいつも、俺にはちゃんと教えてくれないんだと思ったら、詰まなくなっただけだよ。それじゃ」

言い捨てて立ち上がったが、カオルが追いつがってきて簡単に捕まり、抱きしめられる。ユキとは違って、直接的に、力が強い。

「放せよ」

「頼む。許してくれ。そうじゃなかったら、おれ……」

あんまり口調が弱々しいから見上げたら、心底、辛そうな表情だった。

「何て顔、してんだよ。カオル」

「そう……か？」

「俺が泣かせたみたいじゃないか。こないだの理屈じゃ、俺が悪いのか？」

わざと軽く言ったら、カオルはほっとしたように見えた。

「……機嫌、直してくれたのか？」

「その、痴話げんかみたいな表現は止める」

「ただいま」

ドアが開き、ユキが姿を見せた。リビングで立ったまま、二人が抱き合っている姿が目に入れば、普通は驚くだろう。

「……お邪魔、だったかな」

逆に、恐ろしいほど冷たく落ち着いた声は、内心どんなに怒っているのだろうと……、分かってしまう自分も、少々情けない。

「ユキ。チカにばれた。おれたちの関係」

「……で？ 無理に抱いて、こっちに引きずり込もうと？ そういうやり方は許せないって、カオル自身がそう言っただろう？」

「あ、いや……、これは……、チカが怒って出てくって言うから、それは力ずくでも止めたくて。えっと、深い意味はない、から……」
それこそカオルはユキが怖いらしく、慌てて俺を放す。

「やましい気持ちがあつたら、僕を見た途端に放して、言い訳を始めるだろうからね。カオルを疑ってはいないよ」

「そ、そうか」

全身でほつとしている様子が見て取れて、いつそ微笑ましくらいだ。

「じゃ。ほんとに落ち着かないから、部屋引っ込むんで。あとは二人で好きなように過ごしてくれ。あんまり……大きい声とか、出さないでくれると有難い」

言い捨てて部屋に入ろうとしたが、ユキが決めつける。

「心配しなくても大丈夫だよ。今までだって、チカは気づかなかつたんだもの。鈍いのかも知れないけど」

「おいユキ、言い過ぎだぞ。チカがまたへそ曲げたら、どうすんだよ」

もう、十分に曲がつてるよ。

「悪かったね」

「僕の真剣な気持ちも、全然分かってくれないし。それなのに、次々に他の男にも好かれちゃって。致命的な鈍さだね」

「そういうのって、鈍い方がいいような気がするぞ？」

言い返したが、ユキは首を振った。

「初めて会ったとき、チカはすぐに出て行ったからさ……。僕たち、バルコニーから君を見送ってたんだ。そしたら、一度も振り向かな

いどころか、腕時計ばかり気にして……」

「そうそう。それからユキが機嫌悪くって、困ったつけ」

カオルが相槌を打つ。

「何の言いがかりだよ。それに、こっち側にバルコニーがあるなんて、ついこの前まで知らなかったっての」

「そのときの相手が、あの彼でしょ？ まさか、もう逢ってないよね」

ユキの真剣そうな眼差しに、射すくめられそうだった。

「あ、あ、逢うって表現は、ちょっと……。でも、電話かかってきてグダグダいうから、会社の寮なんだって説明はした」

「どうしてそんなに、八方美人なんだよ！ 誰からも好かれたいのか？ 少しは自覚を持ちなよ。危なっかしすぎる。……ねえ、カオル。やっぱり、僕が教えた方がいいかな？」

急に激したと思ったら、カオルを振り返って問いかける。カオルは何度か空咳をしたが、それでも喉に引っかかったような声で答えた。

「……う、うん。ユキがそう考えるんなら。おれも、チカを他の男には取られたくない」

「何で、男限定なんだ！ 今日会った連中でもいいだろ？」

「今日？」

ユキが聞きとがめ、カオルが説明した。

「会社の女子。映画行ってくてことになって、出がけにチカが起きてきたから連れてった」

「そう。でもチカも、僕たちと同じ匂いがするから……。もう、無理じゃない？」

ゆっくり歩いてくるのがどうにも恐ろしくて、ずるずると後ずさる。どんだけ素早かったら、捕まる前に部屋に逃げ込んで、鍵をかけれるんだろう？ そのとき、俺の携帯が鳴った。誰でもいい、いつそ助けを求めてしまおうかとまで思う。

「出なよ。隙について襲ったりはしない」

ユキの言葉は全く信用できないが、取り出してみる。画面にはあまり見覚えのない、女の名前……、ああ、そうだ。今日、番号を交換したんだった。

「チカ、大丈夫？ カオルと仲直りした？ っていうか、襲われてない？」

「サンキュ。ユキも帰ってきて、三人で喋ってたところ。雰囲気微妙なんで逃げようと思ってんだけど、俺が明日ケツを押さえてたら同情してくれる？」

電話の向こうには他の子もいるらしく、けらけら笑う声が響く。

『頑張つてね。おやすみー』

「うん。おやす……み」

電話は、切ってしまった。いつの間にか目の前に、ユキが立っている。俺の背後にはカオルがいて、逃げ場はない。どっちも俺より背は高いし、力でも技でも敵わないのはもう知ってる。今の話が事実になりそうで、非常に拙い状況だ。

「悪い、ユキ。俺には無理だ。こいつ、震えてる」

カオルが、ぼそつと呟く。ユキも、視線が柔らかくなった。

「……そうだね。時期を待とう。チカが自分から、僕の腕の中に飛び込んでくるのも、そんなに先のことじゃないよ」

「絶対にねーよ」

「意地っ張りだね。僕が心理的に無理なら、カオルにだったら抱きついてもいいよ。カオルはそっち側だから、キスクらいはするかもしれないけど、それ以上の行為には及ばないだろうし」

「わかんね。チカは可愛いから」

カオルが恐ろしいことを言い出して、俺はまた震えが来る。

「おやおや。僕たちを二人とも振り回すのか。悪い子だね……、チカの魔性は、美佐緒の比じゃないな」

「だって美佐緒は、ユキの影響だろ？ チカは天然だもん」

「ひとに、変な属性をつけるな！」

「仕方ないよ。真実だから」

06（前書き）

少々……、いやかなり変態だが、仕事のできるユキを見て、落ち込むチ力。元気がなくなつて、何だか具合も悪い……。

翌日から、二人は堂々といちゃつき始めた。……って言っても、元から普通に仲は良かったけどさ。ただ、今までは『行つてきます』だけだったのが、軽く唇を合わせるようになった、ってこと。さすがに直視しづらくて目を背けたが、それが逆に、面白がられたらしい。

「チカもして欲しいのかな。……カオル？」
「うん」

勝手に意思を通じ合つて、カオルが近寄ってくる……って思ったら、後ろからユキに両頬を軽く押さえられていた。

「な、なにすん……」

「何つて。行つてきますのあいさつ」

こんなときまでカオルは男らしく渋く言つて、逃げられない俺にキスしてきた。チュツと音を立てて吸いつき、すぐに離れていく。

「うっわー、信じらんね」

「どうしたの？」

ユキの問いかけに、カオルは思いきり肩をすくめた。

「こんな美味しいもんを、今までユキだけに独占させてたなんて」

「それは申し訳ない。今後は遠慮しなくていいよ」

「よくねーよ。二人とも遠慮しろよ」

もちろん、俺の反論は無視された。

「つか、遅刻するって。じゃあな」

カオルは九時半始業だが、大抵、直行直帰なので朝早くて夜も遅い。ユキの部署は八時半始まりで、俺のそこは九時んだけど、天降り&窓際の集まりで、八時半には全員揃つて。その代わり、夕方の方の六時過ぎには誰もいなくなるけどね。つまり、会社に行くならユキと一緒に、ってこと。

「ほら、早く」

ベージュ色の上下に、錆朱色のシャツを合わせたユキが玄関で誘う。接客も営業もないからだろうけど、すごい色合いだ。俺と違って高そうなスーツを何着も持つてるし、何で寮なんかに入ろうかと考えたのか分かんないくらいだ。

「あー、うん」

靴を履いたが、やつはドアを開けない。こんなところに二人で立つてたら、狭いだろうが。鏡でも見てるのかと思って顔を上げたら、そのまま捕まった。

「何だよ、朝っぱらからふざけんな」

「朝じゃなかったら、抱きしめてもいいんだ。それはいいことを聞いた」

「んな訳ねー、し……」

言い返した言葉が途中になったのは、唇を塞がれたからだ。おまけに、少々時間も長い。

「僕にも、行ってきましたのキスをしてよ。あと、僕からもお返し」

「同じ会社に行くのに、必要ないだろ」

「じゃ、会社のエレベーターで、別れ際にしようか？」

「……それだけは勘弁してくれ。二度と出社できなくなる」

「それなら、毎朝ここでいいね」

よくない。

「チカが引き留めるから、出にくくなっちゃった。このままサボりたいけど、仕方がない。朝じゃなければ抱きしめてもいいって、さつき自分で言ってたことだし、夜まで我慢しよう」

「俺はそんなこと、一言も言っていない」

「愛してるよ。帰りは誘いに行くね」

「……。カオルを大切にしろよ」

理解できない。それこそ、付き合ってたんだろ。今までは俺に内緒だったから、わざと絡んで来たりもしたんだろうに。あのとき……、最初にユキが俺を襲ったときに、カオルが声を荒げたのも、今にな

れば納得できる。

「チ力は特別なんだよ。カオルも、もう分かってきてくれる。僕も、チ力なら、カオルが目の前でキスしても平気かな」

「俺は平気じゃない。そういうの、嫌いだ」

「一人に絞りたいの？ 僕を選んでくれるのならいいけど」

「何で、お前ら二人からの二択なんだよ」

だが、そんな反論は全く耳に入らないらしい。

「カオルは優しいけど、多分、ベッドが中途半端になるよ？」

「うっせえ。朝から変なこと言うな」

「わかった。続きは今夜ね。ご希望なら、実技つきで説明するから」

「要ら……」

あんまり頭にきて、言葉が上手く出ない。第一、昨夜だって色々ありすぎて、よく眠れてないし。

「顔色が悪いな。朝から言うことじゃないけど、早めに帰って、ゆっくり休もう」

「俺を一人にしてくれれば、いくらでも寝てる」

「行こう。遅れる」

話を変えられてしまい、そのまま会社に向かった。エレベーターで普通に別れ、フロア奥の自分の部署に向かう。おっさんたちはもうみんな来てて、揃えたみたいに新聞を読んでいた。

「おはようございまーす」

「おはよう」

こいつら頭硬そうだから、休みの次の日に欠勤や遅刻なんかとんでもないし、敢えて、早めに来ようと思ったのに。ユキのせいで遅くなっちゃった。

「杉崎君、具合でも悪いのかい？ こんなに遅くなって」

遅くない。まだ八時半だ。

「若いんだからって、あんまり無茶するんじゃないよ」

「へーい」

事務のオバちゃんが……、この人は社員じゃなくて、本当にパトのオバちゃんだ……、お茶を持ってきたくれる。

「俺にまで、いつもすいません」

「いーえ」

笑いを堪えているようなので、俺も苦笑してみせる。こういう人には気に入られておけ、というのが母親の言いつけだ。偉そうなジジイはころころ変わるけど、お局様はずっと居座るから、だそうだ。

休み明けで、雑用がたまっていた。決裁書類なんかを他部署に回すような仕事だが、箱に入れて置いておけばルートに乗るのに、持ち回りの方が早いという理屈で、俺にお鉢が回ってくる。2フロア上の、設計部に行かなくちゃならない。判をもらったら役員決済に回せとか言われ、ついでに何とかかんとかの設計図を青焼きでもらってこいとか……、自分が動けつての……。

綴った書類を持って走り、自分のせいでもないのに頭を下げて判をもらい、頼まれた設計図をもらう相手を探してうろつく。みんな、でかい机に向かって作業してるから、話しかけるのも申し訳ない。

「チカ？」

それなりに、長いものには巻かれるようで、他の人と同じ薄いグレーの作業着的なものはおったユキが、机と図面とキャビネットの間から手を振っていた。

「……よう」

「おつかい？」

「そゆこと。情けねーよな。ユキなんか、すげえ仕事してんじゃね？」

「ううん。もう戻るの？」

「あ、ええっと……、悪いけど、訊いてもいい？」

メモを渡して、担当の人の席を教えてもらった。用事を済ませた帰りがけにもう一度近くを通ったが、上司っぽい人と話してたから、軽く頭を動かして挨拶だけして、そのまま帰った。しかし本当

に、自分の仕事が情けない。正直言つてこの会社には、コネと言うか……、実際には、あんまりよく知らない人の、口利きで入れてもらった。使い道がないんだろうな、とまで考えてしまふ。カオルみたいな元気で愛嬌あるやつとか、ユキみたいな特殊技能持つてるやつとか……、昨日会った女の子たちだつて、ただの職場の華じゃない。一人一人が営業社員だ。俺よりはずっと、仕事ができるだろう。ちよつとだけ落ち込んで、自分の席に戻る。すぐに昼休みだ。午後にはオバちゃんと一緒に、提出する書類を折つて表紙をつけ、紐で綴つた。三時になれば俺とオバちゃんを除いたみんなであみだくじを引いて、当たった人が余分に金を出し、俺が自販機で全員分の飲み物を買つてくる。よく言えば平和な、昔のお役所みたいなところだ。ここだけ三十年くらい、時間が戻つてゐたいだ。

五時には、オバちゃんが挨拶して、さつさと歸つていく。他のおつさんたちも、次々に歸り支度を始めた。定時は五時半だが、何しろ六時には全員いなくなる。もちろん俺も、遠慮なく歸るけどさ。珍しく内線が鳴つたから取つたら、ユキだつた。

「まだ、いる？ 僕はもう少しかかりそうなんだけど」

「もう歸る。ちよつと用事あるし」

用事なんか、ない。ただ、誘つてきたから逆らつただけだ。

「手伝つてよ。そしたら、すぐ終わるし。一緒に歸ろう？」

何でこうなるんだ。でも、断れば後々まで絡んでくるのが目に見えて、仕方なくまた、やつの席を訪ねる。何か分かんが、すごい勢いでキーボードを叩いていた。

「チ力。そのプリンターから出てくるから、持つてきて」

「……。何枚？」

ついでに使われて、計算書みたいなのを三部製本してやったら、ユキの仕事も終わりらしい。

「ありがと」

名前の通り優しく笑つて、それから書類を上司の人に渡し、平気な様子で一番先に歸ろうとするから、ちよつと驚いた。

「いいのか？　まだみんな残ってるのに」

「だって、僕の仕事はもう終わったもの。チカもそうでしょ？」

「俺は……」

誰もいなくなったから、帰るだけだ。ユキは仕事ができるから、多少生意気でも許されるんだろう。また、落ち込みそうだ。

「チカと一緒に帰れるなんて、研修以来だね。誘ってよかった。……そういえば、用事って？　お詫びに付き合うよ」

「いいよ。大したことじゃない」

先に帰るための口実だっただけだし。それに、落ち込み続きで元気が出ない。

「ほんとに少し、調子悪いみたいだ。まっすぐ帰って、早めに寝る。……えっと、何つつか上手く言えないけど、ユキにからかわれる余裕も、今はない」

ユキは俺をじっと見て、頷く。

「分かった。別々に住んでいたら、心配だから送っていく、って言うところだけど。それはいいとしても、僕が料理作れたらなあ……、お粥とか」

「やだよ、気持ち悪い。でも……、ありがとな」

本当に、食欲もなかった。ユキがドラッグストアでビタミン入りのゼリー飲料を買い込み、まっすぐ帰る。リビングで無理にそれを飲まされて、明日の朝でいいって言ったのに、シャワー浴びて寝ろってうるさいからざっと流して出てきたら、今度は、自分の部屋で寝ろと言う。そんな危ないところで寝られるもんか。

「いいよ。寝るところがない訳じゃないし」

「駄目だよ。見てないと心配だ。……一緒に寝たいくらいだけど、今夜は我慢する。手は出さない。悪戯もしない。約束する」

ドアを開け放ち、椅子を置いて留めた。

「これで、安心してくれる？」

「……眩しいと、寝られないんだ」

すぐに、リビングの灯りも消してしまう。

「どうすんだよ。カオルが帰ってきたら」

「キッチンの灯りだけつけておけば、大丈夫だろう。じゃ、僕も軽くシャワー浴びてくるから、眠っていて」

普段なら、恐ろしくてこんなところでは眠れない。だけど、今夜は少し辛い。薄暗がりの中でも目に入ってくる、深い海のような青い部屋は、心が落ち着いた。そのまま、眠りに引き込まれていきそうだった。

「もう、眠ったのかな」

低い呟きが聞こえて、あの細い指が、俺の髪を梳いていく。

「ふふっ……、サラサラだ。おやすみ」

掛布団を直して、そのまま離れた。何かして欲しい訳ではないが、いつもあんなにしつこいユキが、あっけなさ過ぎる。でももしかしたら、それほど、俺は顔色が悪かったのかもしれない。

少しは、眠ったのだろうか。気配の違いを感じて、まどろみから覚めかける。

「どうしたんだ？」

カオルが帰ってきたようだ。

「元氣ないし、顔色悪いから、僕の部屋に寝かせた」

「珍しく、紳士じゃないか。ユキはどこで寝るんだよ。俺のベッド？」

ジェラシーじゃない。ユキが好きだなんて、そんなはずないし。どっちかっていうと、カオルの方が近づきやすいくらい。もちろん、恋愛対象じゃないけど。でももし今、二人がふざけ合い始めたら、二人とも嫌いになってしまう……。

「チカの側にいる」

「……お前だって、そんなに丈夫じゃないだろ。ちゃんと寝ろよ。おれが見てる」

「だめ。チカに手を出したら、許さない」

カオルが声を抑えて笑い、話し声はもう聞こえなくなった。俺はまた、眠りに落ちたみたいだった……。

翌朝、早くに目が覚める。実際、落ち込んで寝てしまっただけで、本当に具合が悪い訳でもないし、早く寝たぶん、早く起きてしまったんだろう。

セミダブルのベッドの上には、ユキも眠っていた。きっと、カオルに無理やり寝かしつけられたのだと思う。俺にくっついてはいなかったし、こっちの着ているものも、乱れてはいない。

「嘘つき」

声をかけたら、驚いたように目を開けた。

「な、なに……？」

「一緒には寝ないって、見てるだけだって言ったのに」

「ぼ、僕は何も……」

慌てて、上半身を起こす。ユキが焦るのなんか、初めて見た。あんまり面白くて、腕を回して捕まえた。いつもとは逆だ。

「ありがと。もう元気になった」

「……うん。良かった」

ため息が甘いつて、こんな感じなのだろうか。あいつはふつと息を吐いて、それから、急に我に返った様子だった。

「カオル！ 早く来て！」

「……あー、何だよもうー、そんな大声出して、」

カオルもすぐに、ドアのところに姿を見せる。

「チカに襲われた」

「襲ってな……」

道理でさっきから、ひとの腕をがちり捕え返してたわけだ。

「いいなあー！ おれも、おれも」

「二人とも、いい加減にしろよ」

07（前書き）

カオルとユキが、チカに隠していたもう一つのこととは……？
そして、チカにも小さな秘密があった。そ

結局、三人とも早起きしたことになるって、またカオルが冷凍食品の朝飯を出してくれた。朝から重いってば重いが、昨夜はろくに食ってないし、腹が減ってれば何でも美味い。ユキの淹れてくれたコーヒーも、いい香りだった。淹れ方が上手いんだろう、お茶かなんかやってたのかも、とか、見当違いのことを考える。

「まともなもの、食ってねえだろ。特に朝飯。だから体調崩すんだ」カオルがずけずけ言うから、言い返す。

「人のこと言えるのかよ。ユキだって、朝、食べてるのなんか見たことないぞ」

「ユキは、サプリメントとドリンクなんかで、栄養だけは足りてるはず。俺は途中で、ちゃんと何か食うよ。構っても煩く思われるかって遠慮してたが、これからは無理に叩き起こして、飯食わせた方がよさそうだな」

まるで、母親だ。確かに俺は寝起きも悪いし、何か食べるよりは寝ている方を選ぶが……。

「ちよつと昨日は、詰まんないことを考えて落ち込んだだけだよ。具合が悪い訳じゃない」

「どうしたんだよ」

カオルに訊かれ、ユキも心配そうな顔で見てる。でも、元凶の二人に向かつて、言えることじゃない。それに、100パー、こつちの癖みだ。

「何でもない。ご馳走さん。ありがとな」

いくら早く起きたからって、そろそろ支度をしないと、間に合わなくなる。

「そんなんじゃないやおれたち、お前が心配で離れられねえだろ。夏から一人暮らしなんか、できねえだろうが」

「大丈夫だよ。学生するときも一人だったんだから」

逆に、比べて落ち込む対象がいなかったから、こんなにげっそりはしなかった。

「母親がたまに来て、いろんな食い物を置いてったし。……って、夏？」

やっぱり俺は鈍い。カオルの言葉が、今頃になって耳に引っかかった。

「会社から何か言ってきたのか？ 寮の空気が出たとか」

「……。俺って、基本的に口が軽いのかな」

「そうだね」

ユキが頷いて、俺を真っ直ぐに見た。初めて見る、硬い表情だった。

「僕たちは、チカにもう一つ隠してたことがある。僕たちだけのこじやないから、絶対口にはしないつもりだったけど、チカが訊いてきたら、カオルじゃ誤魔化せないし、最初から全部話すよ」

「何だよ、いったい……」

訳が分からない。こいつらができてたってことの方が、俺にはよっぽどの大事件だったのに。これ以上の隠しごとって……？

「今年の初めに、僕とカオルは、会社に呼び出されたんだ。深い考えはなかったんだけど、僕は、美佐緒が住む家では暮らしたくなかったし、どうせ引越さなきゃならないのなら、空気があればいいなって程度で、寮の希望は出してた。カオルも、一人暮らしがしてみたくて、入寮希望にしたんだったよね」

ちらつと、カオルの顔を見る。話を引き取って、今度はカオルが口を開く。

「ユキは見るからに頭がいいし、出来る奴だっと思われたんだろう。おれはまあ、元気だけが取り柄だけど、声もでかいし目立つからな」「それで……、事情のある新入社員がいるから、しばらくの間、一緒に暮らしてくれないかと打診された。寮がいっぱいだから入れないってことにするって。どういうことかと訊き返したんだけど、人

事も、正直言つて何をしたいのか決めてなかったみたいで、はかばかしく答えない。逐一報告しろとも言うのなら、そんなスパイみたいな真似はしたくないし、今からでも、内定を辞退させてもらうつて答えたら、焦つて、そうじゃない、ただ、一人にはしておけないんだ……つて。とりあえずは三か月、夏くらいまででいいつて」「御社とはご縁がなかったと考えさせていただく、つて、学生が言うことじゃないよな。おれ、横で聞いててぶつたまげた」

「それで僕を好きになつたらしいよ」

「うつせ。でもほんと、そんだけ。チ力のことは、名前しか聞かされなかった。生意気な奴だつたら面倒くせえなつて思ったけど、ユキは、一目で気に入つちまつたし」

「僕だけじゃないでしょ。カオルは？」

「おれ……、女だと思つたのに、とか、必死で誤魔化したんだけど」「今にも食いつきそうな目つき、してたよね」

思い出したらしい、ユキがくすくす笑う。

「そつか。ごめん。ありがとう。……迷惑かけた」

ひねくれてる訳じゃない。俺には、それしか言えなかった。カオルもユキも、顔色を変えてこつちを見る。

「人事つて、あの黒スーツだろ？俺から頼んでみる。二人のことは何も言わないから、安心してくれ。やっぱり一人で住みたいつて言えば、多少の負い目もあるだろうし、一度くらいは俺の我がままも聞いてくれるだろ」

やっぱり自分は、存在だけで、他人に迷惑をかけてしまうんだと思う。配属も、使いどころに困つた人事部長が押し込んだのだろう。実際、事務のパートの、そのまた補助みたいな仕事しかしてないし。自己管理もできるのか心配で、同期のホープ二人なら、俺の面倒を見てくれると思つたんだろうな。逆に、出来過ぎてて、こつちが落ち込んだけど。

「駄目だつて、そんなの。お前が一人暮らしなんか、できるわけな

い。さっきの話だって、何とかしてお前を誘って、どっか別のところ借りて三人で住もうって言いたかったんだけど、話の持ち出し方がわかんなくて……」

カオルが焦って言ったが、ユキが静かに手を挙げて、止めさせた。「ごめんね、チカ。訊かないつもりだったけど……、君の事情を知っているのは、人事部長だけ、ってこと？」

「……多分」

「じゃあ、あの人に頼めば、三人ですつと暮らせるのかな」

「そっか。やっぱりユキは頭がいいな」

単純なカオルは、嬉しそうだ。

「そのうち何か訊いてくるだろうから、チカは一人じゃ食事もできないし、僕のベッドと一緒に寝たがるとか言っちゃおう」

ユキが勝手なことを言うから、カオルが不満そうに言い返す。

「何でそうなるんだよ。飯食わせたのはおれだし、あと……、おれなんかは羨ましいけど、普通の相手にそんなこと言ったら、チカがよっぽどガキみたいに思われるぞ」

「いいじゃない。引き離されるより」

「止めてくれよ。どうせなら、二人で暮らせばいい。……俺が辞めれば必然的にそうなるし、黒スーツも、もう悩まなくて済むだろう」
そんなこと、したくない。何しろそれこそ俺は頭も大してよくないし、何の特技もない。内定なんかちつとももらえなくて、もう最後の手段と思って恥を捨て、あの男に頼んだ。どこかに口利きをして欲しいと言ったのに、当の本社に入れられたのは驚いたが。実際、大きい会社の方が、色んな奴がいて目立たないのだろうと考え直した。その後は何も言ってこなかったから、このまま忘れられてもいいと思っただくらいだった。

「だめ！」

ユキが珍しく大きな声を出し、俺の横に来る。膝をついて、椅子に座ったままの俺を後ろから抱きしめた。

「教えて、チ力のこと。一人で苦しまないで」

「おいチ力。ユキを泣かすなよ」

見上げたら、カオルも歪んだ顔をしていた。

「二人にそんな風にされたら、ますます俺がしんどい。とっとと消えてしまいたいくらいだ」

「ぶっ飛ばすぞ！」

カオルにぶっ飛ばされたら、本当に身が持たない。仕方なく、俺は口を開いた。

「……大したことじゃないよ。えっと、俺さ、母親しかいないじゃん。生まれた時から父親はいなくて……、どんな奴だったかも知らないんだけど……、一応、もう死んじゃった……とあるジジイとDNAの型が一致するんだってさ。男だから、Y染色体で調べられて、確実らしい。本当に、それだけ。だからって、今まで金もらったこともないし、普通に暮らしてた。母子家庭だから奨学金もらって大学行っただけど、就職決まらなくて……、めちゃくちゃ困っちゃって……、そういや、あのジジイの葬式の時迎えに来たおっさんが名刺くれたなって思い出して電話したら、今は本社の人事部長です、なんて言うからさ……、どこでもいいんで口利いてくれませんか、って頼んだだけ。まさか、この会社に入れてくれるとは思わなかったけど」

「あの人事部長って、前は会長の秘書だったんだっけ、」

「カオル？ チ力は何も言ってないよ」

ユキに注意されて、カオルは慌てて口をふさぐ。

「でも、チ力は愛されてる。名前の千の字は、その人にもらったんだろう？」

創業者の、前会長の名前くらいは、会社のパンフレットに書いてある。『千』をゆきと読むのは、それなりに珍しいかもしれない。『知らない』

何の思い出もないし、俺には母親しかいないと考えてきた。知らない相手を恨む気持ちもない。ただ、就職口がなくて切羽詰ってた

から、一度くらい利用させてもらおうと思ったただけだ。そのジイさんだって、母親に連れて行かれた葬式で、寝てるのを見たのが初めてだし。

「あ、でも……。えっと、保育園かな、運動会を見にきたジジイがいてさ。普通の公立の、貧乏っつい保育園の園庭でドタバタやってただけなんだけど、でかい車が停まって、変な年寄りが出てきたからびっくりしたっけ。思いつき俺をガン見して、名前を訊かれた。胸に縫い付けてあるひらがなが読めないのかって、言い返した記憶はある」

その後そいつは体調を崩し、会社の経営からも離れて、数年後に亡くなったらしい。葬儀に参列しろと、そいつの秘書だったという黒いスーツ姿の男が迎えに来て、母親が俺を連れて行った。もう会えないのだから、きちんとさようならをしなくてはならないと言われたが、顔を見るまで、その年寄りのことだとも気づかなかった。そしてやっぱり、なんで自分がその人の葬式に行かなきゃならないのかも、そのときは分からなかった。

「今の社長って、前会長の女婿だろ。確か、娘しかいなかったんだよな」

カオルが呟いたが、もう、ユキも咎めない。

「人事部長が悪人なら、チカを手元に置いて、それこそ自分の娘さんとも結婚させたかもね。チカは大人しいから、利用するにはちょうどいい。僕たち二人を側近としてつけておけばいいし」

「今からでも、それでいいじゃん。そしたら、おれたちもずっと一緒にいられる」

「チカはそんなこと、望んでないでしょ。それに、あの人も悪人じゃない。チカの処遇に戸惑っただけだろうし」

ユキが静かに言うから、俺も、ゆっくり息を吐いた。

「もう、いいか。二人とも、早くしないと遅刻する」

「うん、そうだね」

「朝飯食う時間が要らないから、まだ間に合う。早起きもするもん

だな」

二人が俺から離れたところで、どうしても、もう一言言わずにはいられなかった。

「これで分かっただろ。俺みたいな出来損ないが、この会社に入れてもらった理由。だからもう、構わなくていいよ。黒スーツには、ちゃんと言っておくから」

そしたらまた、ユキもカオルも、俺の前に戻ってくる。

「僕さ、美佐緒の母親が後妻だとか言って家に乗り込んで来たと思ったら、すぐに美佐緒が生まれて……、嫌いで嫌いで堪らなくて、苛めまくってたら、あんな風になっちゃったんだよね。あいつの素地はともかく、さすがに僕の所業は人としてどうか、とは思う」

「おれも、二卵性だから似てないのは仕方ないとしても、環ばかり可愛いのが腹が立ってさ、お兄ちゃんも女の子の格好をしたらとっても可愛いってみんな言ってるよ、って毎日毎日、嘘を吹き込んだら、ああなったぞ。詐欺師の才能があるのかもな」

「だからチ力が、自分を卑下する必要は全然ないって訳。人間性は、ぼくたちの方が下だよ」

「おれたちからしてみたら、こんなに魅力的な奴はいないけどな。こないだの女どもも、またチ力に会わせろって煩いし」

口々に言われて、慰められてるんだとは分かってるが、少しは気が軽くなる。

「ほら、早く。着替えさせてあげないと駄目かな？」

「い、いいよ」

ユキに脱がせられたら、何されるか分からない。俺は急いで自分の部屋に向かった。

「おれももう少しゆっくりして、今朝は本社に顔出そうつと。理由はどうしよっかな……、あ、そうだ。人事部長に談判しようぜ。部屋が狭いんで何とかしてくれって」

「そうだね。チ力をもっといい部屋に住まわせろって、暗に匂わせ

ておけばいい。億ションの完成在庫も、どこかにあるでしょ」

「ひっでーな」

カオルとユキが、勝手なことを言いながら笑ってる。俺は、黒ス
ーツがちよつと気の毒になった。

08（前書き）

言葉通り人事部に乗り込んでいった、カオルとユキ。怖いもの知らずなので部長にも社長にも絡む。
この回だけ、三人称です。

都心のビル街の一角にそびえる、ひととき大きな建物に、次々と社員が吸い込まれていく。ビルの前には、『白石建設』と社名を刻んだ石造りの大きなプレートが置かれていて、自社ビルらしい。まだ始業の少し前なのか、ざわついた様子の社内、管理人事本部の奥の応接室に、先程から若い社員が二人、くつろいだ雰囲気ですわっていた。そこへ、黒いスーツを着た人事部長が姿を現す。

「おはようございます」

「ああ、うん。ご苦労様」

二人に先に声をかけられ、焦って返している。リストラや待遇見直しという雰囲気ではない。どう見ても、社員の方が態度が大きい。「き、今日はどうしたのかな。わざわざ、報告には及ばないと言っておいたはずだが」

「ええ。でも、クレームは上申してもいいんじゃないかなと思って、眼鏡をかけた、いかにも頭の良さそうな若者が、口を開く。しかし、スーツはチャコールグレーで地味だが、黒いシャツにネクタイが銀色だ。かなり自由な職場環境なのだろうか。

「な、何か、彼に不都合が……？」

「そうじゃねえんすけど。あいつは、大人しいもんですよ。放っておくと飯も食わねえから、おれらが世話焼いてます。ただ、あの部屋、三人で住むには狭いかなって」

もう一人の、身体のかな男が答えた。口調からしても、こちらは体育会系らしい。

「せめて洗面所周りは複数あった方が、有難いんですけどね。それに、詳しい事情は存じませんし興味ありませんが、彼のことは……もっと厚遇した方が、いいんじゃないですか？」

「七瀬君、彼から何か、訊きだしたのかね？」

人事部長が顔色を変えて問い返す。七瀬と呼ばれた男は、大げさ

に眉を上げた。

「おや。彼を問い詰めれば、何か面白いことが聞けるんですか？」

「じゃ、今晚にでもつるし上げっかなー」

もう一人の男が、ぼきぼきと指を鳴らす。人事部長は文字通り青くなった。

「ら、乱暴は止めなさい、小清水君。彼はそのう……、玩具にしている存在じゃない。頼む」

「とりあえず、今日こちらに来ましたのは、」

七瀬が話をまとめた。

「当初三か月というお話でしたが、彼は一人暮らしなんか無理だと思っんです。僕たちも心配だ。もう少し広い住まいを提供していたければ、と、申し出るためです」

「……それは、好意からと受け取っていいんだね」

「当たり前っすよ。たとえあいつがどこの誰だとしても、おれらにとっては単に可愛い奴だし」

小清水が腕を組んで頷いたが、七瀬が鋭く止めた。

「カオル！」

「小清水君、いま、何と……」

もちろん人事部長も聞きとがめ、思わず腰を浮かせる。七瀬が首を振って抑えた。

「思わせぶりは、止めておきますね。僕たちは、貴方を脅迫に来たんじゃない。実際、彼はおしゃべりじゃないし。僕たちが知っているのは、素直な、いい青年だってことだけです。正直言っで、とても気に入っている。そして何故か、貴方に目をかけられているらしい」

「そうそう。おれらは宮部取締役人事部長の毒牙から、あいつのケツを護ってやらなきゃならん」

「やつ、止めてく、……そういう、冗談は、す、好かな……」

宮部という名らしい人事部長は、座り直して額の汗を拭いた。それでも、目の前の二人に悪意がないことは、理解できる。

「分かった。近々に、どこか探しておこう」
「よろしく願います」

話が終わったので、宮部がほっとした様子で立ち上がり、二人を送り出そうとしたのだが。かなり急ぎ足というか、ほとんど走ってくるような足音が、複数聞こえてくる。

「宮部君！ 何処だね？」

「し、社長……」

「部長は今、ミーティング中で……」

壁の向こうから、そんな会話が聞こえてくる。宮部もすぐにドアを開けて、声をかけた。

「今、終わったところです。そちらに伺います」

「ああ、いい。応接にいるのなら私が行く」

声と共に、白髪混じりだが、五十歳前と思われる男が入ってきた。壁の向こうの対応からすると、この会社の社長らしい。剃刀のように尖った目つきに、贅肉の一片もない身体だ。手には、履歴書らしい書類の入ったファイルを持っている。

「これは、どういうことだね？ 私としたことが、今の今まで気づかなかったとはうかつだった」

いらいらした様子で指を突いた履歴書には、大人しそうな若者の写真が貼られ、その横には『杉崎千佳』という名前が書いてある。先程の二人の社員も、つられたようにそれを覗き込んだ。

「ああ、君たちはもういい。先程の話は善処するから。業務に戻りなさい」

宮部に言われて、社長もやっと、彼らに気付いたようだった。
「君たちには関係ないことだ。外してくれ」

「そうかな。だって、その写真の主は」

「おいユキ！ 拙いって」

七瀬が口を開き、小清水が慌てて止めたが、もう間に合わない。

社長の男は、きつと七瀬を振り返る。

「何だね、君は」

「僕たち、人事部長に命じられて、その杉崎くんと一緒に暮らしているんですよ。お守りと言った方がいいのかな」

社長は今度は、宮部に視線を移した。

「この二人は確か……、入社試験の出来が一位と二位だった新入社員だろう。……七瀬、と、小清水と言ったか。その二人をあれにつけて、何を企んでいる？ クーデターでも起こすつもりか？」

「わ、私は何も……」

「ふうん。彼にくつついていれば、会社の乗っ取りもできるんですか。社長が焦るくらいなんだから、きつと、すごい人物なんだろうな」

宮部は焦っているが、七瀬は平気で、社長にまで言い返す。

「君は、誰に向かって口を利いているのか、分かっているのだろうか？」

「ええ。眼鏡は視力を矯正するためのものですから、よく見えますよ。実際、僕なら職なんかいくらでもある。辞めるというのなら即、出ていく。そうそう、彼も連れて行っていいですか。僕のお気に入りなんだ。名前が少し、古くさいところとかもね」

「だよなあ。おれなんか最初、読めなかったもん。会社のパンフで、創業者さんの『白石千男』って名前に振り仮名ついてたから、同じ字で、やっと読めた。千って書いて、ゆきって読むなんてな」

横から小清水も口を挟み、社長の顔色が変わった。宮部はとっくに、真っ青になっている。

「ああ、もう始業時間だ。席に戻らなきゃ」

「おれもー。じゃ、失礼します」

言いたいことだけ言って、二人の若者は出て行つた。社長は人事部長を見やり、早口で命じる。

「三時からなら、時間が取れる。ヒアリングと称して、ここに呼んでくれ」

先程の二人は廊下で立ち止まり、指を三本立て頷き合った。しっ
かり聞こえていたようだ。

09（前書き）

何も知らないチカが、今日もパートのオバちゃんと同職的な作業をしていると？

また主人公視点の一人称にもどります

二時半ころ、だったと思う。俺とパートのオバちゃんど、また書類を作ってた。申請折り、って言われて意味不だったが、見本を見せてもらって感動する。

「すっげー。ここ引つ張れば、全部広がるんだー」

「今はね、何でもコンピューターだけどね。こうやって残るものは、紙の書類だわね」

とはいえ、不器用極まりないもんだから、せつかくの図面も汚らしく歪んでしまう。また、設計部に行つて原本を借り、青焼きコピーをさせてもらわないとならないかもだ。誰も使わないミーティングテーブルの上に、ごちゃごちゃと図面や書類を広げて悩んでいたら、誰かがフロアに入ってきた。ここに用があるのは、デスクのあるおっさんたちか、俺か、オバちゃんか、なんだが。誰か間違えて入ってきたのかな、とまで思いつつ顔を上げたら、白髪のおっさんが一人で立ってた。見覚えがあるような気もするが、その辺の偉そうなおっさんと同じにも見える。一秒くらい考えてから、客だったら悪いから、いらっしやいませって言おうとした、途端。オバちゃんか、すごい勢いで立ち上がった。

「お疲れ様です！」

つられて俺も立ち上がる。会社の偉い人なんだろう。そしたら、窓際のおっさんたちも新聞を置いて、こつちを見た。

「おお、白石君。元気でやってるかね」

「ええ、お陰様で。皆さんのご助言は、いつも有難く拝聴し、経営に役立てております」

ここのおっさんたちが偉そうなのは元からだ、経営がどうか……、あ……。

「白石社長、お疲れ様です」

やっと顔を思い出した俺が、さり気なく便乗して挨拶をする。

「杉崎君だね」

「はあ、あの、いえ。はい」

今の返事で、どう考えても呆れられた……、と思ったが、社長は俺の顔をじつと見て、また口を開いた。

「人事で、新人社員へのヒアリングだ。私も立ち会う」

「ええっ」

聞いてなかったけど、まあ、人事のヒアリングくらいはあると思う。けど何でそれに、社長が立ち会うんだ。第一、迎えに来るのだって、おかしいだろ。この人はそんなに暇なのか？ おまけに、この部署のおっさんたちも騒ぎ出した。

「白石君、せめて三時過ぎにしてもらえないか。杉崎君には頼みたいことがあるんだ」

「何です？」

「休憩時の、お茶を買ってきてもらわないと。毎日、一緒に飲んでるんだし……」

社長は唇を引き結び、指先を額に当てる。確かに、まともな人が聞いたら頭も痛くなるだろう。

「……杉崎君、来たまえ」

「はい」

俺は少々、しょぼくれて、社長の後ろをついていく。そしたら向こうから、見覚えのある黒スーツ……、人事の宮部さんが走ってきた。何か言おうとするのを、社長が制する。

「会議が早く終わったんだ。私が勝手に、彼を迎えに行つたまでだよ」

社長はずかずかと人事部の奥まで入り込んで、面接なんかを使うブースじゃなく、応接室を覗き込む。

「誰も来ないように言ってくれ」

そう命じるから、俺は覚悟を決めた。俺の素性がばれたんだろう。会社をだましたつもりはないが、宮部さんに迷惑がかかったら悪い

から、いざとなったら自分が悪いことにしようと思う。どうせ首になるんだったら、それくらいは背負ってもいい。

長いソファに俺を座らせ、社長と人事部長は向かい側に座った。そして、おもむろに社長が口を開く。

「久しぶり、になるね。先代の告別式以来だ。君はまだ、小学生だったかな」

「……はあ」

正直言つて、ちつとも覚えていない。宮部さんに案内されて棺に花は入れたが、親戚の人たちが来たら、母親が俺の手を引いて、すぐ帰ってしまったんだ。

「そのときは話もできなかったが……、君はずい分、お母さんに似ているようだ」

「そうですか」

だから何だ、とも思う。父親に似てないのは、俺のせいじゃない。

「お母さんは、お元気かな」

「はい。ありがとうございます」

別に、俺に愛想を言わなくてもいいのに。さすがに焦れた俺が、用件はなんですか、とか訊こうとしたら、急に社長が大きな声を出した。

「何故、直接私に会いに来なかった？ どうして、宮部なんかを頼ったんだ？」

「え、あ、あの……、何でそんな……」

「社長。彼は何も知らないんです。杉崎君の……、母上は……、こちらのことは、本当に何も教えていない」

「何故だ！」

社長がまた大声を出したが、宮部さんは静かに言い返す。

「……彼女は、そんな女じゃない。今までだって、ねだりがましいことは何一つ言ってこなかった。ただ、俺が……、前に渡した名刺を思い出して、彼が連絡をくれたんだよ。就職の相談にのってくださいって。それなら、俺が預かるうと思つた」

宮部さんの口調が、変わっていた。社長もそれを咎めない。この人たちは、前からの知り合いのようだった。

「どうせ俺は婿養子の外様だから、何も知らないのだと思っていた。それでも、あいつと子供はどこか遠くで、静かに暮らして思うってたんだ。それがいきなり、この会社にいたんだぞ？ あんまり驚いて、訳がわからなくて、お前が何か企んでるのかとまで思ったくらいだ。何で俺に教えない。預かるなら、俺だろうが」

まあ確かに、人事部長は入れてはくれるだろうけど、どうせ預かってくれるなら、社長の方がいいに決まってる。

「……待てよ。宮部てめえ、佳子に会ったのか？」

「ああ」

社長がまた怒鳴りそうだったが、宮部さんが抑えた。

「千佳君を預けろって言ったら、怒ってた。この……、白石の家の世話にだけは、ならないって。だから俺が、あいつに頭を下げて頼んだ。それこそ俺は社長じゃないし、採用枠を一人増やす程度の権限しかない。でも、何か一つくらいは、俺にも……先代の息子さんの役に立たせてくれって言った」

「カツコつけやがって。くそつたれ」

社長は非常に、口が悪かった。外見とは、えらい違いだ。

「そしたら、そんなにうじうじしてるから禿げるんだと言って……、薄いだけで、禿げてなんかいないのに……」

「ふん。いい気味だ。俺のことは何か言ってたか？」

「全然。第一、お前が今、白石って名前で、ここで社長してることも知らんだろ。俺も教えてないし。とっくに存在も忘れてるか知れん」

「てめえ！」

とうとう社長は立ち上がり、宮部さんに詰め寄る。

「今、どこにいるんだ。俺にも会わせる。それから、こいつは俺が引き取る。あの時は何もできなかったが、今なら……」

「偉そうなことを言うんなら、その時にやっつけ。俺も何もできな

かったから、お前を責める資格はないがな」

社長は黙って、座り込んでしまった。空気の抜けた風船みたい、
っていうのはこんな感じだろうか。

「あ、あの……」

やっと静かになったので、俺も口を出す。

「お二人は、俺の……、えっと、私の、母親をご存じなんですか」
社長が宮部さんを振り返り、宮部さんは首を振った。何も言っ
ていない、ということだろう。そして、宮部さんが説明してくれる。

「君のお母さん、杉崎佳子と、俺たち二人は同期だったんだよ。も
しろん他にも同期入社の者はいたが、仲は良かった」

「気が強くて、口が悪くてね。だがやたら、年配の連中と親しくな
る。先代も最初、会社の偉い人だとも気づかずに、普通のおじさん
だと思って親切に接したのだと聞いた……、まあそれなりに何かあ
ったんだろうが、いつのまにか君を授かったようで、何も言わずに
辞めてしまった。秘書だった宮部が間に入っていたから、俺なんか
宮部が佳子と付き合ってたのかと思って、非常に不愉快だったがな」
「何という濡れ衣だ。……それでも、彼が生まれてから、それは晴
れたんだろうな」

「うむ。宮部よりは、オヤジの方がはるかにマシだ。だが、白石の
家の連中は、素直に受け取らなくてな。科学的な鑑定の結果、親
子関係は証明された。ただ、君を取り上げようとしたんだよ。母親
としては、耐えられないだろう」

「佳子と子供がいなくなつて、会長が半狂乱だからさ、俺なんか毎
日探し回って……、何年もしてからやっと保育園を見つけて、運動
会を見に行ったら……、あのクソジジイが、千佳と話をした、って、
喜んで喜んで……。後で佳子に、何しに来たって怒られてな」

宮部さんは言葉を詰まらせ、横を向いてしまった。社長は咳払い
をして、話を引き取る。

「宮部が変な方に話を持っていくから、湿っぽくなっちゃったじゃ
ねえか。とにかく彼女は、年寄り受けが良かった。君が今、再開発

部の顧問たちと仲が良いようにね」

社長が付け足したら、宮部さんも驚いたようだった。

「あの爺さんたちを手懐けてるのか？ そりゃすごい」

「……何ですか、それ。使い走りさせられてるだけです」

「ヒアリングだって連れ出そうとしたら、三時まで置いとけ、一緒に茶を飲むんだとか。ふざけた爺どもだよ」

二人は楽しそうに笑い、それから、もう一度俺を見た。

「佳子の息子で、その上に父親があのおヤジなんだから……、先が楽しみだ」

「俺は出来損ないですよ。寮の同室の二人があんまり優秀で、毎日落ち込んでます」

「ああ、あの二人なら今朝、私を脅しに来た。もっと広いところに住まわせろって」

「私にも絡んできたな。非常に生意気な連中だったが、悪いことではない。君にはどこか、子会社の一つを任せるから、取り巻きの二人も連れてきなさい」

社長に言われて、俺は首を振った。

「二人は取り巻きなんかじゃない。俺のことを何も知らなくても、大切にしてくれた。得難い友人です」

「……そうか」

「あと、別に俺……、一生、今の部署の平社員でもいいんで……」
「そんなこと、出来る訳ないだろう！」

社長が笑いだし、宮部さんとまた昔話を始めた。そしてまた、すぐに喧嘩する。とうとう社長が俺に、母親に電話しろと言いだしてまだ仕事中断って断ったのに、どうしてもこねるから、勤務先に電話してみた。大抵は一人で事務所にいるから、大丈夫だと思ったことは思ってたが……。

「母さん？ 仕事中にごめん。あの……、今、人事のヒアリングに呼ばれてて、それで……」

宮部さんが話がある、くらいには受け取ったかもしれない。そし

たら、白石社長がいきなり送受器を奪い取った。

「佳子か？ 俺だ、俺。……バ力野郎、詐欺じゃねえ。俺だ、黒川。宮部のハゲが、佳子と千佳を隠していやがったんだってな。……ごめんな、本当に。……へっ、何で謝るのかって……、ああ、あのハゲが情報を握りつぶしてたんだった」

「ハゲじゃない！」

宮部さんが横から口を出し、電話口に割り込む。

「宮部だ。黒川は出世に目が眩んで、白石の家に婿養子に入ったんだよ。佳子や千佳君とは敵同士だし、そんな奴のことは思い出したくもないだろうから、あえて話はしなかった」

「宮部でめえ……」

電話を放り出して喧嘩を始めたから、俺が送受器を拾い上げる。

「ごめん、騒がしくて。なんかどうしても、母さんの声が聞きたいって。呼び出しくらったから、首になるかと思った」

『いいよ、でも、びっくりした。宮部がハゲそうだったのも驚いたけど、あの黒川が、社長ねえ……名前が白石つても笑えるわね。今でも、丸顔なの？ 男のくせに、お菓子ばかり食べてたけど。やっぱ、ハゲてるのかな』

「うっん。すごい痩せてる。頭は白髪だけど、ふさふさだよ」

「俺か？ 俺のことか？ 佳子が俺を気にしたんだな？」

社長が騒ぎ立て、宮部さんが鼻で笑った。

「話題に出たくらいで……」

やっと解放されたのは、七時ごろだった。窓の外はもう暗いし、どうせみんな帰っちゃっただろうと思いつながら、自分のフロアに戻る。案の定、照明もかなり落ちて、入口辺りにしかついてなかった。でも、入ってすぐの、いつも俺とパートのオバちゃんが座ってるデスクに、カオルとユキがいた。ひとの顔を見た途端に立ち上がった……、誰もいないから良かったけど……、両側からいきなり抱きつかれた。

「なん……だよ、びつくりするなあ……」

「チカ、大丈夫だったか？」

「三時からヒアリングって聞いてたのに、その前に社長が来て連れ
て行かれたって言うから、心配したんだよ」

「ユキが大騒ぎするから、俺も急いで来たんだぞ。人事の宮部さん
が同席してるんなら、無事だとは思っけどさ」

「ここのおジサンたちも、すごい気にしてた。杉崎君を取り上げな
いで欲しいんだがなあ……、って」

「……その割に、もういないじゃない」

「僕たちが待つてます、って言っただからね」

そして二人に、今日の出来事を報告させられる。

「どっかの社長にしてくれるんなら、うんって言えばよかったのに。
もちろん、おれらもついてくからさ。だけど、カッコいいな。二人
は取り巻きなんかじゃありません、得難い友人です、って……。ど
うせなら友人じゃなくて、恋人って言えよ」

「恋人が二人もいて堪るかっての。その前に、男じゃなか」

「いいじゃん。本当のことなんだから」

カオルが俺を押さえ込んで、髪をぐしゃぐしゃかき回す。少々苦
しい。

「助けてくれ、ユキ」

ユキは机に肘をついて、組み合わせた両手の指にあごを乗せ、楽
しそうにこっちを見てるだけだ。

「うん？ 今夜チカが、僕のものになるのなら」

「……ううーっ」

「あと、ふと思ったんだけどね。子会社は要らないっていうのは、
本社を超越せっていう風にも受け取れるんじゃないかと……」

「チカって、結構でかいこと考えてんだなー」

10（前書き）

やっぱり、三人で暮らしてて良かった。そう、思う……

三人で軽く食事をして帰ったら、ファックスから間取り図が何枚も出ている。宮部さんが留守電に送ってくれたらしい。自分たちが見ておく、疲れただろうからチ力は早く寝ろと、部屋に押し込まれた。確かに、色んなことがあって、少し疲れた。

前に、カオルやユキに言ったけど、自分の父親だつて人に対して、恨みがましい気持ちは持つていない。何しろ、知らないに等しいんだから。俺がひねくれなかったのは、母親が俺をめちゃくちゃ大切にしてくれてるのがわかってたからだ。母親と二人で、贅沢はできないにしても、不幸だと思つたことはなかった。ただ本当に、今はみんなそうだけど、就職口がなくなつて……、母親にこれ以上負担をかけたくなかつたから、宮部さんのことを思い出したんだ。実際に知り合いだなんてことも知らなかつたし、母親も何も言わなかつた。頼つたことさえ、後で怒られた。宮部さんが挨拶に来て、頼んでくれたから何とかその場はおさまつたけど、その他の話はほとんどしなかつたから、単に、あのジイさんの秘書だつた人だとだけ、ずつと思つていた。

ベッドに入つて、目を閉じたら、宮部さんや白石さん……、黒川さんつていった方がいいのかな……の話を思い出す。たつた一度、保育園のときに会つたきりの、あのおじいさん……、どんな風に話しかけてきたんだっけ。そうだ、笑つてはいなかつたけど、怖くはなかつた。喜んでくれてたのなら、もっと話をしてやればよかった。小さな子供のときから、お年寄りとは仲良く話ができたのに。あの人は、もう、会えないのに……。

そう思つたら悲しくなつて、何だかわかんないけど、叫んでしまつた……と思つたら、目が覚めた。……夢か。起きた勢いで、そのまま部屋を出る。もうリビングは真っ暗で、二人も眠つた後のよう

だ。何を感傷的になってるんだろう。バカらしい。やっと我に返って、ドア脇にへたり込む。

「チ力……、チ力？」

向こうのドアが開いて、誰か出てきたと思ったら、いきなり抱きしめられた。力強い腕に、裸の厚い胸板。カオルだろう。今、自分を取り戻したばかりなのに、俺はそこにすがりついてしまう。

「うなされてたのか？ 叫び声がしたから、」

「……うん。あのジイさんに会ったときのことを思い出して……、俺と話をして喜んでたって、宮部さんに聞いたからさ……もっと、たくさん話をしてやればよかった。何でできなかったんだろう、って。たった一度しか、会えなかったのにさ。俺って、あんなガキのころから、グズだったのかな」

「黙れバカ野郎。詰まんねえこと言うな。保育園のガキが、そんなに世間ずれした知恵が回るものか。相手は喜んでたんだろ？ チ力はいいい対応したんだよ」

「そう……かな……」

呟いたら、うつかり涙が出た。いい年した男が何だよ、って思うんだけど、仕方ない。胸にくっついてるんだから、カオルもすぐに気づいたんだろう。前みたいに、指先で拭ってくれる。

「悪い」

謝るなら、こっちだろうに。なぜかカオルが謝ってきた、と思ったら……、いきなり、キスされた。驚いたが、逃げるに逃げられないし、実際どうでもよくて、大人しくしてた。

「本当に、最低だよ。気弱になってる時に……。今ならチ力は、逆らわないって分かってるのに」

ユキの声に、カオルが焦って、また謝る。

「うん、悪かった。でも、チ力が泣きごと言うのは耐えられなくて黙らせようと思って……」

「ぼくでさえ、今の場合は、髪を撫でる程度で堪えるけどな」

ユキに苛められて閉口してるカオルが面白くて、俺はやっと笑え

た。

「俺のことで、喧嘩すんなよ。あと……、邪魔して、悪かった」

「……何の？」

そのころにはもう、目も暗闇に慣れていたし、開いたドアの奥のカーテンの僅かな隙間から、星明りが漏れているくらいは感じ取れていた。開いているドアは、一つだけだったし、二人が同じ部屋から出てきたのは、俺にだって分かる。それに、上半身だけ……みたいけど、裸のカオルも、普段は見慣れない。

「大丈夫、もう眠れると思う。えっと……、つ、続きをどうぞ」

「ふ、ふざけんな」

俺もそうだが、カオルもつつかえる。

「似合ってないよ、チカ。それにもし、続きというのなら……、チカも参加しなきゃ。ねえ？」

「え、遠慮する……」

「ふふつ。初心なチカの方が可愛い。もううなされないように、僕のベッドと一緒に眠ろう」

「えーっ！ ユキは昨日、チカと一緒に寝たじゃないか。今夜はあれだ」

「カオルは抑制が効かないじゃない。危なくって」

危ないと言ったら、ユキの方がずっと危ない。俺はそうってカオルの腕から逃げ出し、立ち上がった。

「ちゃんと一人で寝れるよ、おやすみ。ありがとうな。二人と一緒にいられて、ほんと、感謝してる」

「起きてて寝言ほざいてんじゃねえよ。水くせえな」

カオルには怒られ、ユキには突っこまれる。

「じゃあ、おやすみのキスとありがとうのキスをしてよ。もちろん、僕たちからお返しはするから。その後で、よく眠れるように、少し身体を解してあげるからね？」

「……そんなことされたら俺、もう人の側に帰ってこれなくなる気がする」

「なあユキ、早く引越して、チカと一緒に寝られるようにしようぜ」

「今なら、僕とカオルが一日おきに、チカを抱いて眠ればいいけど……、どうせなら、三人で眠れるくらいの部屋が欲しいよね」

「選択肢は、他にないのか……？」

とにかく。一人で寝ると言い張った俺を、ユキとカオルは仕方なさそうに見送る。毎晩こんな風に迫られたら、そのうち根負けしそうで恐ろしい。

翌日は叩き起こされて、三人で朝食をとる羽目になった。朝食についてうか、ユキが買い置きしてるゼリー状のドリンクだ。まあ、こういうのなら喉も通る。

で……、ドアのところで色々タバタして……、会社に行った。昨日心配してくれてた、って話だったけど、おっさんたちの態度に変わりはない。ひとの顔を見たとなんに、昨日いなかったから頼めなかった、とか言って、コピーとか買いものとか言いつける。まあ、それで時間が過ぎればどうでもいいんで、俺は言われたことだけやって、昼には買ってきた弁当をパートのオバちゃんと一緒に食って、午後もまた、似たような作業をした。

「頑張ってるかね」

頭の上から声をかけられ、見たら、白石社長だった。オバちゃんはまだ飛び上がって挨拶をして、多分、お茶を淹れに行ってしまった。

「これを」

間取り図面みたいなのを何枚も寄越す。

「そこにあるものに、紛らせて置けばいい。どこでも、好きなところにしなさい」

早口で言ってきたけど、俺が机の上に散らかしてたのも、宮部さんがくれた引越し先候補の図面だ。こういう会社だから目立たないってば目立たないが、それにまた追加されたって訳。何かもう見

るからに、広くて高そうな部屋ばかりだ。

「同期の者より、お母さんと呼んで一緒に暮らしたらどうかね。もちろん、費用などは、」

優しい言い方だったが、俺は顔を上げて首を振った。

「俺には、身の丈に合った暮らしがいいんです。母親も、今、何が嬉しいって、俺に仕送りしなくてよくなったってことが一番だつて言っていました。会社の寮に入れてもらっただけで、十分です」

別に、引越もしなくていいくらい。下手に越したら、あの二人の間で寝なくちゃならないかもしれない。それが危険なことだつていう事実は、この人や宮部さんには言えないけど。

「そう、か」

ちようと戻ってきたオバちゃんのお盆からお茶を自分で取って、白石社長はごくつと一口飲んだ。

「ご馳走様。手を止めさせて、済まなかったね。では、」

「白石君じゃないか」

窓際のおっさんたちが、今頃気付く。案外、座ったまま昼寝してたのかもしれない。

「ちようどいい。君も参加したまえ」

「何事ですか」

もうすぐ、三時だった。おっさんたちは無理やり社長もあみだくじに参加させ、俺は今までより一つ多く、自販機の紙パック飲料を買いに行かされた……。

(了)

10（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。ギャグ的なBL関係と人情話を無理にくっつけております。くすつと笑っていただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7422s/>

ルームシェア

2011年5月6日18時55分発行